

人魚姫

hemochi

遙か、東の果ての国。

名は綏国。水に恵まれし、豊饒の地。

神に選ばれし御子、羅紗が王遼義を選び、玉座について、六年。

綏国は安定の中にあった。

父が買ってきたその水妖を、幼い理曇は飽きもせず眺め続けていた。

水妖とは妖の一種だが、人に害を成すことはほとんどない。上半身は人間の姿をしていたが、下半身は鱗に覆われ、魚そっくりの形状をしていた。その水妖はまだ幼いのか、十歳の理曇よりも体は小さく、あどけない顔をしていた。

水妖は弱い妖力を持っているのだが、観賞用に飼われる場合は、万が一の場合のために、魔術師によって封じられる。この水妖もまたそうだった。妖力を封じられた幼い水妖は、声すら出すことも出来ない有様で、狭い水槽の中に閉じこめられていた。

虹色の髪が、泳ぐ度に水中で揺れる。成長すればさぞかし美しい水妖になるだろうと、父は言った。

「こんな事をして、海の神様は怒らないの？」

幼い理曇は、父に尋ねた。

人の姿に近い妖は、神の使いだという伝説もある。理曇がそう感じたのも、間違いではないだろう。

「怒ったりするものか。こんなに大切に扱っているのだからね」

理曇の疑問を、父は笑い飛ばした。

ー本当にそうなのかな？

大人が両手を広げたほどの大きさの水槽に閉じこめられ、いつまでもくるくると舞い続ける水妖は、果たして大切にされていると言えるのだろうか。鎖に繋がれてはいなくとも、水からは上がれない、自由のない状態が、水妖にとって幸せだと言えるのだろうか。水槽の中の水妖を見つめながら、理曇はずっと考えていた。

理曇がそんなことを考えていたことを、大人達は知らない。いつまでも水槽から離れないのは、水妖がよほど気に入ったせいだろうと、気にも留めていなかった。

幾夜めかのこと。理曇はなかなか寝付くことが出来ず、寝台に転がっていた。

誰かが呼んでいるよう気がする。

耳を澄まして、何も聞こえない。それなのになぜか胸がざわめいて、眠ろうにも眠れない。寝台を抜け出したことが知れば、きっと叱られる。それを承知していた理曇は、家中の気配が寝静まるのを十分に待ってから、そっと寝台を抜け出した。

水槽の置かれた客間は、月明かりに青く輝いていた。

淡い光の中で、彼女は理曇を待っていた。

緑色の二つの瞳が、理曇を見つめている。

「僕の声が、解る？」

声を出すことの出来ない水妖は頷いた。

「僕を、呼んだの……？」

再び彼女は頷いた。おそらく、残された妖力をすべて使って、理曇を呼んだのだ。水妖をずっと気に掛けていた理曇だったからこそ、その声が届いたのだろう。

水槽のガラスを挟んで、二人はお互いの手のひらを重ね合った。

「僕を待ってたんだね」

《オ……ネガ…イ……》

理曇の頭の中に、言葉が生まれた。振り絞るような、か細い声は、水妖の声だと理曇には解った。

《カエ…リ…タイ……》

水妖のまなじりに浮かんだ滴は、一瞬のうちに水の中へ溶け消えた。

「帰る？ 海に帰りたいの？」

水妖は頷いた。

大切にしていると父は言ったが、やはり水妖は海に帰りたがっていたのだ。

「解った。少しだけ待ってて」

ほんのわずか、考え込んだ理曇は、そう答えた。

理曇の家から海までは、さほど遠くない。子供の理曇でも、一息に走れるほどの距離だった。急げば、うまく水妖を海へ帰してやる事が出来るはずだ。理曇は、そう、自分を信じることにした。

運び出した跡は残しなくなかった理曇は、どこかから大きな布を探し出して来た。

床に布を広げてから、理曇は大人の背丈ほどもある水槽によじ登り、水妖を水から引き上げた。水妖に、両手で水槽の縁に捕まらせてる間に床に飛び降り、抱いて降ろしてやる。

広げた布は濡れてしまったが、床は濡れてはいない。理曇のもくろみは成功だった。

途中、見つかってはまずいからと、水妖を布で包み隠した。

水から上がった水妖は、水のないところでは呼吸するのが辛いのか、胸を喘がせていた。

「ほんの少しだから。我慢して」

理曇の胸に抱き上げられた水妖は、理曇に体重を預け、布の隙間でこくりと小さく頷いた。

誰にも見つからないように、理曇は裸足のまま、窓から夜の表へと飛び出した。

妖の出やすい時間に、表を歩く者はそういない。真夜中の街には、人の姿はなかった。

それでも理曇は、見つかってしまわないよう慎重に、海への道を急いだ。万が一誰かに見つか

ってしまえば、家の者に叱られるだけではすまない。二度と水妖を海へ帰してやる機会を訪れないだろう。

相変わらず、水妖は苦しそうな呼吸を繰り返していた。

「もう少しだから。頑張って」

――間に合わなかったらどうしよう。

不安が胸をかすめた。泣きたくなるのを堪えて、理曇は走った。

ようやく海が見えたときは、どれほどほっとしたか。

船着き場の突堤の先まで、水妖を抱いたまま進んだ。水面までの高さはいくらかあるが、船が着けるだけの水深もある。そこからならば、飛び込んだとしても水妖に危険はないだろうと思ったからだ。

「気をつけて帰るんだよ」

水妖が頷くのを確かめてから、布を解いてやった。

両手を繋いだまま、ゆるゆると海面へと降ろしてやる。水妖の尾ひれの先が水に触れたのか、ぱしゃんと水が鳴った。

この手を離せば、水妖は海に帰ってしまう。二度と会うことは出来なくなる。一瞬、理曇は手を解くことをためらった。

それでも、引き上げることもできなかった。妖力を封じられたまま、狭い水槽に閉じこめられて泣いている水妖を見ていると、胸が痛くてたまらないのだ。

別れを惜しむように、水妖の手をきゅっと握りしめて、理曇はその手を離した。

派手な水音を立てて、水妖は海中へと帰っていった。

しばらくして、水妖は海面から頭を出し、理曇を見た。

「見つからないうちに、出来るだけ遠くまで行くんだ。早く」

理曇に命じられ、水妖は泳ぎだした。

しかし、ふとすると止まり、理曇を振り返る。そのたびに、理曇に早くと追い立てられる。何度か繰り返していたが、やがてその姿も見えなくなってしまった。

それでも、理曇はそこから離れることが出来なかった。

あの美しい水妖には、二度と会えない。

そう思うと、切なくて涙がこぼれそうだった。だけど、今はまだ泣くわけにはいかない。誰にも見つからないように家へ戻り、寝台に潜り込まなければいけないのだから。

「行かなきゃ……」

自分に言い聞かせるように呟き、理曇はやっと立ち上がった。

そして翌朝。

「水妖がない！」

理曇の悲鳴に起こされた家の者達は、水妖が消えていることをようやく知った。侵入者があった気配も、形跡もない。水妖だけが、忽然と消えていたのだ。

「妖力が、ちゃんと封じられてなかったんだろうな」

だから逃げてしまったのだろうと、父は言った。

もちろん、水妖がいなくなったと泣いている理曇が犯人だと、疑う者はもちろんいなかった。

「男の子でしょう。いつまで泣いているの」

母に窘められたが、涙を止めることは出来なかった。

水妖が可哀想で、その手で海へ帰してやったとはいえ、二度と会えなくしたのも、また自分だった。

切なくて切なくて、たまらなかった。涙が止めどなく溢れた。

虹色の髪の水妖。じっと理曇を見つめた、翡翠色の瞳。あの美しい水妖には、もう二度と会うことは出来ない。

その日、一日中、理曇は水槽の前を離れず、ずっと泣いていた。

遠い昔の出来事だった。

きっとあれが初恋だったのだ。

薄れることのない、水妖の姿を脳裏に描きつつ、二十歳になった理曇は思う。

あの水妖は、美しく成長したのだろうか……、と。

光のかけらがほとんど届くことのない水底に、魔法使いは住んでいた。

「虹色のちびちゃんが来たよ～～」

魔法使いの下僕で、赤い軟体動物の姿をした妖が、来客を告げた。

「ちびちゃんじゃないもん」

怒った拍子に、虹色の髪がふわりと揺れた。光の少ない水底でも、彼女の髪は、見事な輝きを持っていた。

岩の洞穴の奥で、魔法使いは、妖達に集めさせた柔らかな海藻の寝台に、しどけなく寝転がっていた。

寝返ると、寝台の上に、黒髪が流れるように広がった。訪問者の顔を見るなり、うんざりした顔つきになった。

「……また来たのか」

「今日こそは願いを聞いてもらうからね」

声と同時に、魔法使いの体の上に、丸い物やら欠片やらがバラバラと降ってきた。

「石も宝珠も珊瑚も、これで全部。足りないとは言わせないから」

胸の上に落ちた真珠をつまみ上げ、魔法使いはつまらなそうにそれを眺めた。

「質はまあまあだな」

「まあまあじゃない。上等だもん」

虹色の髪の水妖は、頬を膨らませて抗議した。

「魔法使い～～。ちびちゃんを怒らせるなよ～～」

「ちびちゃんじゃないって言ってるでしょ？」

さっきの妖とは別の、青色の妖が部屋の隅で呟いたのを、虹色の髪の水妖はキッと睨み付けた。

「これで足りるでしょ？ 薬をちょうだい」

「……そこまでして、地上に行きたいのか？」

「当たり前でしょう？ もう一度、あの人に会うのっ！」

何を言っても、虹色の髪の水妖に聞くつもりはないらしい。つまらないと呟いて寝返りを打とうとした魔法使いは、肩を掴まれ、すんでの所で止められた。

「お願い、魔法使い。どうしても薬が欲しいの」

「……この石と宝珠、それからお前の髪だ。それならば考えてやらなくもない」

魔法使いの冷たい声と言葉に、水妖は思わず手を引っ込めた。

あの人綺麗だと誉めてくれた髪を手放すなど、考えたこともなかった。

魔法使いは水妖を一瞥し、冷たく背を向けてしまった。魔法使いは、これで水妖が薬を諦めたと思ったのだ。

「一解ったわ」

低く答えた水妖を、振り返った魔法使いは、驚きの混じった表情で眺めた。

「髪だって何だってあげる。だから、薬をちょうだい」

「そうか……」

酷くだるそうに、魔法使いは体を起こした。

ふわりと持ち上げた右手を軽く振っただけで、すべては終わってしまっていた。

水妖の髪は、少年の髪のように短く切られ、見事だった虹色は赤茶けた色に変化していた。切り取られた長い髪は、元の虹色をとどめたまま、魔法使いの手の中にあっただ。

水妖は唇を噛みしめていたが、泣き言は漏らさなかった。ただ、一粒、目尻に溢れた涙が水に溶けていった。

魔法使いは、青色の妖に薬を持って来るよう命じた。

ふわふわとした足取りで運ばれてくる薬の瓶を水妖はひったくろうとしたが、器用にすりと逃げられてしまう。

「これが薬だ」

手の中へ運ばれてきた小瓶を、魔法使いは掲げて見せた。

「早くちょうだい」

出された水妖の手を、魔法使いは無視した。

「地上へ行っても、声は使えんぞ」

「どうして!？」

「声を発すれば、二度と水の中へは戻れん」

それでも行くのかと、魔法使いの目は問うていた。

迷うことなく、水妖は小瓶を掴んだ。

「後悔するぞ」

「後悔なんてしないもん」

叫ぶように言い残して去る水妖を、魔法使いはため息と共に見送った。

やがて、水妖の姿も気配も、すっかり消えた頃。

岩室のどこからともなく、忍び笑いが聞こえてきた。

「まったく、魔法使いは意地悪だから～～」

「ちびちゃん、泣いちゃったじゃないか～～」

「虹色の髪のままじゃ、人間じゃないってばれちゃうからだって、ちゃんと説明してやりゃいいのに～～」

「ちびちゃん、かわいそ～～」

今まで陰に潜んでいた妖達は、さっきのやりとりについての感想を、口々に述べた。

「魔法使いは、ちびちゃんのことを好きなくせに～～」

その一言が、魔法使いの逆鱗に触れた。

「お前ら、泡と一緒に消されても構わないんだな」

静かな声ただけに、魔法使いの本気は、妖達にも充分伝わった。

横暴だとか何だとか、口々にぼやきながらも、妖達は与えられた仕事に戻っていった。

「ちびちゃん、もうすぐ女になるね～～」

赤の妖は、怯えもおそれもせず、魔法使いに言った。しかし、魔法使いは答えなかった。

「魔法使い。この宝珠はどうすんの～～？」

「いい。放っておけ」

水妖が、薬と引き替えに置いていった石や宝珠の散らばった寝台の上に、魔法使いはごろりと寝転がった。

「魔法使い、この髪はどうすんの～～？」

いまだ手放せずにいる虹色の髪を指して、青の妖が聞いた。

「……これは、俺の、だ」

「素直じゃないんだよな、魔法使いは～～」

「とっとと失せろ」

睨まれたところで、青と赤の妖はこれっぽっちも恐ろしいなどとは感じていなかったが、これ以上主の機嫌を損ねても都合が悪い。くすくすと笑いながらも、赤と青の妖は何処かへ姿を消した。

小さく舌打ちして、魔法使いは寝返った。

『後悔なんてしないもん』

水妖の残した、叫ぶような声が、耳に蘇る。

……まあ、いい。

あの、聞く者の心をとろかすような甘い響きを、人間が耳にすることは無い。

声がないのだから、思いを伝える事なんて出来ない。

それどころか、あの水妖が想い人と出会えるかどうか解らない。たとえ再会できたとしても、あれからもう十年も経っている。人間が変わるには十分すぎる時間だ。

そのうち、地上にも飽きるか失望して、水の中へ戻ってくるに違いない。

その時は、この髪を返してやろう。それまで、この髪は預かるだけのこと。

ふと、一番綺麗な瓶に美しい虹色の髪を詰めて、棚に並べておくことを思いついた魔法使いは、柔らかな寝台から起きあがった。

地上で始まる物語

音はなかった。

しかし何かが違う。気配が、違う。

理曇は足を止め、腰の剣に手を掛けた。

人影のない街道だった。街には近いとはいえ、この辺りは墓地が側にあり、昼間でも妖が出てもおかしくはなかった。

息を殺して、異質な気配の正体を探る。

道ばたの茂みが、風ではない揺れ方をした。

同時に、飛び出してきた影があった。

何度も妖と対峙してきた理曇だったが、その瞬間、動くことが出来なかった。ただ純粹に、飛び出してきた物の、思いがけない正体に驚いてしまったのだ。

それは妖でも、獣でもなかった。飛び出してきたのは、少年。しかも少年は裸だったのだ。

少年は理曇を見るなり、必死の面もちで駆け寄り、理曇の体にしがみついた。

「待ちやがれ、この……」

少年を追って茂みを飛び出してきたのは、見るからに悪人面の男だった。着衣は乱れていた。何をしようとしていたのかは、鈍感な者にでも解っただろう。

男は理曇を見るなり、まずいという顔つきになった。しかし開き直すことに決めたらしい。単純なのか、顔色を見ているだけで、男が何を考えているのか理曇には解った。

「この男は、お前の身内か？」

「その子は俺の……」

言いかけた男を、理曇は一瞥で黙らせた。

震えながら理曇にしがみついていた少年は、赤茶色の髪の頭を振った。

もう安心していいのだというように、理曇は泣きじゃくっている少年の背中を、軽く叩いてやった。

「この子は俺が連れて帰る」

「そんな……」

「文句があるなら、この先の江都の季和家へ来ればいい。末の放蕩息子の理曇と言え、知らない者はいない。この子との関係を証明する正式な書類を持ってくれば、返してやる」

少年は、はっと顔を上げ、嫌だというように首を振る。

「大丈夫だから」

少年だけに聞こえるように、理曇はそっと言った。

当然、男がそのような書類を用意できるはずがない。それを解っているからこそその言葉だった。

「目障りだ。消えろ」

男は舌打ちを残し、逃げるように立ち去った。

理曇にしがみついていた少年の、緊張が解けたのが解った。

「怖かったんだな。もう、大丈夫だから」

理曇の言葉にほっとしたのか、少年は再び泣きじゃくり始めた。

しかし、少年は声を上げて泣くことはしなかった。

「もしかして、お前、声が出せないのか？」

落ち着くのを見計らって問うと、少年はしゃくり上げながら頷いた。

「そうか……。可哀想に」

悲鳴を上げる事すら出来ない子供を、無理矢理襲おうとした男の卑劣さに、猛然と腹が立った。見逃してなどやらずに、周辺警備隊（周辺都市を警備する警備隊の名称）に突き出してやった方が、世のためだったかもしれない。少なくとも、二、三発は殴っておくべきだったと、理曇は後悔した。

「お前、服は？ 荷物や大事な物はなかったのか？」

探しに戻らねばならないほどの、大事な物はなかったらしい。それならばわざわざ、行く必要はないように思われた。それよりも、一刻も早く、少年を安心させてやれるところまで連れて行ってやりたかった。

「俺の家はすぐそこだが、とりあえず一緒に来るか？」

理曇の服の裾をきつく握りしめ、少年は頷いた。

理曇は、旅装の外套を外し、少年の肩に掛けてやった。

「ちょっと待て。足を見せろ」

よく見ると、少年の足は裸足で、しかもどこをどう歩いて来たのか傷だらけだった。とても、これ以上は歩けそうにない。

仕方ないと呟いた理曇は、ひょいと身をかがめるなり、少年の体を横抱きにすくい上げた。

「落ちないように、しっかりとしがみついてろよ」

頷いた少年は、言われたとおりに、理曇の首に腕を廻し、しっかりとしがみついた。

「こら、苦しい……」

慌てて手を離して、今度は腕から落ちそうになる。さらに慌てて、またしがみつiki、どうすればいいのか解らず、とうとう少年は泣き出しそうな顔を作る。

「俺を殺さない程度に、しがみついていればいいんだ」

そう言って笑ってやると、少年はにっこりと笑って、頷いた。

はっとするほど愛らしい、優しい笑顔だった。

なるほど、これほど可愛いのが、襲われたのも無理はない……。などと思いかけて、理曇は首を振った。少年が可愛いことが、無体を許す理由にはならない。

どうしたのかと、少年は理曇の顔を覗き込む。

「なんでもない。行こうか」

笑った少年の髪は、なぜか、潮の強い香りがしていた。

綏国の王都警備隊に属する理曇が江都に訪れたのは、久しぶりの休暇を利用して、親不孝ばかりしている息子が両親に顔を見せるためだった。

理震の生家である季和家は、海にほど近い江都の街でも指折りの商家だった。季和家には三人の息子がいたが、末の理震は昔から評判の放蕩息子で、家業には全く関心を持っていなかった。十四歳で家を飛び出し、どういう経路を経たのか、王都警備隊に入隊した。

家は、兄たちがいてくれるから、信頼して任せておける。だからこそ理震は、綏国王遼義に忠誠を誓い、王と王都を守る任に就くことが出来たのだ。

王都警備隊は、腕っぷしが強いだけでは入隊できない。相応の頭脳も持っていなければならぬ。十四歳という最年少で入隊を果たした理震は、それだけの実力と資質を持っていたとも言えた。

理震の属する第七隊は、現在、王の直属として、警備隊とは名ばかりの、『体を張った雑用係』として動いている。公式行事などに表立って出てくることもない。任務中は決まった休暇など無く、半年に一度ほど、十五日程度の休みが貰えるだけ。なかなか割の合わない仕事だった。

それでも、六年間、一度も職替えを考えなかったのは、理震が第七隊の仕事に向いていたことに加え、王都警備隊に名を連ねることに誇りを持っていたからだろう。

家へ戻ると、真っ先に、理震は少年を井戸端へ連れていった。足の傷を手当しようにも、泥を落とさないことにはどうしようもない。

腰掛けに座らされた少年は、外套を搔き合わせ、何をされるのか不安げに理震を見つめた。

「ほら。足を出すんだ」

無理矢理掴んだ泥だらけの足は、赤ん坊のように柔らかく、今まで一度も歩いたことのない足のように思えた。洗ってやろうと水を掛けた途端、理震の手が傷口に触ったのか、水が滲みたのか、足を引っ込めてしまう。

「このまま放っておくと、傷口が膿んで、足を切り落とさなければならなくなってしまうぞ」

幼い頃、理震自身がさんざん聞かされた言葉だった。本当なのかと問うように、少年はじっと理震を見つめた。

「ほら。足を出すんだ」

脅し文句がよほど効いたのか、今度はおとなしく従った。

まなじりに涙を浮かべながら、きゅっと瞳を閉じて、少年は痛みを我慢している。

泥を落としてみると、どこでこれだけの傷を作ったのか、足の傷は思ったより酷かった。可哀想にと呟きながら、手早く泥を落としてやり、乾いた布で拭いてやる。

再び少年を抱き上げ、両手が塞がっているのをいいことに、理震は戸を蹴り開いた。

「お帰りなさい。あら、まあ……」

理震を迎えたのは、一番上の兄の嫁、采耶だった。

「姉さん、薬箱を貰えませんか」

不作法を見つかってしまったことに肩をすくめながら、言った。

「理震ってば、こんなに大きなものを拾ってきたりして」

驚きもせず言っただけの采耶は、薬箱を探しに、奥へ引っ込んだ。

この放蕩息子は、昔から捨て犬やら猫を拾ってくるのが得意だった。いつかは理震が人間を拾

ってくることを、采耶は予想していたのかもしれない。

「どうせ拾ってくるなら、お嫁さんを拾ってあげればいいのに」

戻って来た采耶は、くすくすと笑いながら少年に薬箱を持たせた。

「落ちていれば、拾ってきますよ」

冗談には冗談で答え、家を出て以来そのままにしてあった自分の部屋へ、少年を連れて戻った。

とりあえず、無いよりはましだろうと、昔、自分が着ていた服を引っ張り出し、少年に与えた。華奢な体つきの少年は、十四の頃理曇が着ていた服をだぶつかせている。それでも、見た目はずいぶんとよくなった。

寝台の縁に少年を座らせ、傷の手当をしてやる。幼い頃から生傷が絶えなかった分、手当をする手つきも慣れている。

「そういえば、まだ、名前も聞いてなかったな」

少年はぱくぱくと唇を動かしたが、声を出せないことを思い出し、俯いた。

「お前、文字は解るか？」

顔を上げた少年は、理曇をきょとんと見つめ、小首を傾げた。手を取って、手のひらにいくつか文字を書いてみたが、解らないと首を振る。どうやら文字がどのようなものかさえ、知らなかったようだ。

「仕方ない。お前、自分の名前は解ってるのだろうか？ 声は出せなくてもいいから、とりあえず言ってみろ」

唇の動きで、音を判断しようと言うのだ。

理曇の目を見つめながら、少年はゆっくりと唇を動かした。

「……ヒ、スイ、か？」

少年は嬉しそうに頷いた。

「いい名前だ。文字を知らないのなら、真聖真名は解らないだろうが、恐らく『翡翠』だろう。同じ名前の宝珠がある」

理曇は、ヒスイの手のひらに『翡翠』と書いた。

「文字には、仮名文字と、真聖文字という、二種類の文字があるんだ。仮名文字は、ただ音を写しただけの文字だ。『あ』という音には『あ』という文字というように、音の数だけ文字がある。真聖文字というのはもっとたくさんあって、文字自体にいろんな意味が込められている。その真聖文字を使って、もう一つの名前を付けるんだ。音は同じだが、真聖真名には意味が込められてる」

仮名文字ではこう書くと、『ひすい』と文字を書いた。

「仮名文字と真聖文字が違うのは解るか？」

ヒスイは自分の手のひらを見つめたまま、頷いた。

「手話も知らないようだし、文字を覚える必要もなかったということは、つい最近まで、ちゃんと声が出せたのだろう」

手話とは何だというように、ヒスイは首を傾げる。

「声が出せない者は、手や指を使った合図で、会話することが出来るんだ。あいにくと俺は詳しくないが……」

ヒスイは自分の両手を広げて見つめ、どうすればよいか問うように、理曇を見た。

「そうだな。まず、仮名文字を覚えるんだ。たいがいの会話なら、それで済む。暇があれば、俺が教えてやるから」

解ったというように、ヒスイはこくこくと頷いた。

「次は腹ごしらえだな。ヒスイ、お腹空いただろ？」

少年はうつむき、小さく頷いた。

「理曇。食事の用意が出来てるよ」

母親の真曄が顔を覗かせた。いつもなら声を張り上げて呼ぶだけで終わるのだが、采耶に聞いた理曇の拾い物が気になったらしい。

「ちょうどよかった。行こうか」

立ち上がった理曇を追いかけ、ヒスイは理曇の服の裾を掴んだ。

「……家の中ではぐれたりほしらないと思うが」

それでも、少年は手を離そうとはしない。

「ずいぶんと懐かれたもんだねえ」

呆れたように、真曄は笑う。

少年は、不安げに理曇の顔を見上げていた。

「……ま、いいか」

頭に手を乗せて髪を撫でてやると、嬉しそうに懐にすり寄って来る。

「ほんと、采耶の言うとおりに、嫁か恋人を拾ってきてくれればよかったんだけど、子供の方が先だとはねえ」

真曄のため息は、無視することにした。

突然、珍客を連れ帰ったにもかかわらず、食堂には二人分の食事が用意してあった。ヒスイに食事させながら、理曇は考え事に夢中になっていた。

とりあえず、周辺警備隊にヒスイのことを問い合わせてみなければならない。もしかするとヒスイは家出少年で、心配した家族が届けを出している可能性もある。届けが出ていなければ出ていないで、何か面倒な事件に係わってる可能性も無くはない。

周辺警備隊の届けるのはいいが、連中にヒスイを預けるのは気が引ける。荒くれどもの中に子山羊を放り込めば、また先刻と同じ事の繰り返しになるかもしれない。ここで預かる方が得策に思われた。

つい最近声を失ったというのなら、声が出ない原因を確かめておいた方がいいかも知れない。口封じ目的で声を封じられた可能性もある。それならそれで、面倒なことに巻き込まれている可能性が、さらに高い。

じっと見つめている理曇に不安を感じたのか、ヒスイは食事の手を止め、表情を陰らせた。

「早く食べてしまえ。後で、文字を教えてやるから」

現在、家の中で一番暇なのは理曇なのだから、当然といえば当然の役目だろう。

それを聞いて、ヒスイは慌てて果物を呑み込み、途端に咽せかえた。

「落ち着いて食べればいいんだ」

背中を叩いたりさすったりして、どうにか落ち着く。

「ほんっとに、お前はバカだなあ」

言葉とは裏腹に、ヒスイを見る瞳は優しい。

不安げにヒスイは理曇を見たが、優しい眼差しにほっとしたのか、微笑んで返した。

そういえば、靴を買ってやらなければならない。サンダル式の物より、ちゃんと足を覆う物の方がいいだろう。

とんだ拾い物と、予定外の出費に、理曇は密かにため息を吐く。拾ったのは自分なのだから、自業自得と言えなくもない。

訳も分からないまま、ヒスイはにっこりと笑う。

まいったな……。

久しぶりの休暇だというのに、どうやら、この休暇はゆっくり過ごせそうもない。

理曇は、己の拾い癖を、ほんの少し恨めしく思った。

あれから――理曇がヒスイを拾ってから――すでに十日経つが、事態は何の進展もなかった。

周辺警備隊に問い合わせしてみたものの、声を失った少年が近隣の街で行方不明になった事実はおろか噂もなく、もちろん届け出もなかった。同じ年頃の子供がいなくなったという話もなかった。

ヒスイがどこから来たのか、なぜあの場所にいたのか、いまだ解らないままだった。

声を出せない原因を確かめるために、医者にも診せた。喉に何の奇形も、薬を使った跡もなく、結局、声が出せない原因は分からずじまいだった。何らかの魔道が掛けられているのかもしれないと、医者は言った。何の手の施しようもなく、ヒスイは声を失ったままだった。

仮名文字を教えてみると、ヒスイは飲み込みは早く、この十日で、筆談に不自由ない程度に文字を覚えてしまった。

頭は悪くないのだが、ヒスイは物事を知らなすぎた。

靴を買い与えるために街へ連れ出してみると、そこいら中のものを珍しがり、興味を持ち、触りたがる。何が危険で、何が危険でないのか解っていないから、理曇は片時も目を離す事が出来なかった。

ある時は、街角の揚げ菓子の屋台の、煮えたぎった油に手を突っ込みそうになったし、またある時は、店先の花を触ろうとして、店の親父に怒られるより先に、派手に棘に手を引っ搔かれていた。

純粋な赤子のように、ヒスイは何も知らないのだ。

面倒は面倒に違いなかったが、何事にも目を輝かすヒスイを隣で見ているのは、不思議と楽しかった。

「理曇。どこへ行ってたの？」

家へ戻るなり、采耶に捕まった。どうやら理曇の帰りを待ちかまえていたらしい。

「ヒスイが何か？」

不在の間に何か不始末をやらかしたのかと理曇は眉をひそめたが、そうではないらしい。

「あの子、あなたがいないとずいぶん寂しそうにしていたから」

この十日間で、ヒスイはさらに理曇に懐いてしまった。理曇の姿が見えなくなると不安げに探し、見つけたときにはほっとして笑う。感情の豊かな子供なので、あからさまにそれが解る。「もうすぐ王都に戻らなければならないので、それまでに出来ることは片づけておきたかったんですけどね」

今日も周辺警備隊の詰め所に寄っては見たが、ヒスイに関する情報は何も手に入れられなかった。

「ヒスイには言って出かけたのですけれど」

「ええ。聞いたわ。あの子、とてもいい子ね。緋沙を任せても大丈夫なんですもの」

緋沙というのは采耶の娘で、まだ一歳にも満たない。

「本当に大丈夫ですか？」

街で大騒ぎしたヒスイを知っている分、理曇の不安は大きい。

「よく面倒を見てくれてるわ。何かあれば、ちゃんと私を呼んでくれるし」

本当にそうならばいいのだけれどと肩を落としかけたところへ、泣いた赤ん坊を抱えたヒスイが、二人の元へ駆けて来た。

采耶は赤ん坊を受け取り、あやしたが、泣きやんではくれない。

「あらあら、お腹が空いたのね」

乳をやるからと断って、赤ん坊を抱いた采耶は、奥の部屋へと戻って行った。

ヒスイは、やはり理曇を見ると、ほっとしたように笑った。

「ちゃんと帰ってくると言っただろう？」

髪をくしゃくしゃにしてやると、笑いながら、されるがままに任せている。

「姉さんが、お前に緋沙を任せていられるから助かると誉めていたぞ」

廊下を歩きながら、ヒスイは理曇の腕にじゃれついてくる。

大きな窓のある客間――かつて、水妖の水槽が置かれていた、あの部屋――が、ヒスイのお気に入りだった。窓の側の床に腰を下ろすと、ヒスイは理曇の脇にちょこんと座った。

わくわくと目を輝かせ、理曇の手元を覗き込んでいる。

おとなしく留守番をしたら、土産を買ってくると約束していたのだ。

「いい子にしてた、ご褒美だ」

懐から取り出した中味を、床に撒いてやる。

出てきたのは、色とりどりのガラス玉だった。ヒスイは目を輝かせて、それらを見つめた。

「宝石ほどの価値はないが、綺麗だろう？」

こくんと頷いたヒスイは、一つ一つガラス玉を手にとって、光にかざした。

「どの色が好きだ？」

問うと、しばらく悩んでから、深い藍色の玉と、緑色の玉を、左右の手に一つずつ持って理曇に差し出した。

「こっちは海の色だな、それからこっちは……、お前の瞳の色」

ヒスイは嬉しそうに頷いて、ガラス玉をきゅっと握りしめた。

ヒスイは光るものが好きらしい。おとといは水遊びにさんざん付き合わされた。何度も水を掬っては、空へ向かって投げあげる。水の滴が光を受けてきらきら光るのが楽しいらしい。また昨日は、街へ出たときに駄菓子屋でガラスのおはじきを見つけ、いつまでも眺めていた。根負けして買ってやると、家へ帰り着くなり、おはじき遊びに付き合わされた。

「遊びは後にしよう。今日はどんな文字を覚えたんだ？」

尋ねると、ヒスイは差し出された手のひらに、指先で文字を書いた。

どんなもじ。

ヒスイはふざけて、そう書いた。仮名文字であれば、もう、すらすらと出てくる。ずいぶん頑張ったらしいことは、容易に想像がついた。

「そら、は書けるか？」

頷いて、ヒスイは理曇の手のひらに、そら、と文字を書いた。

理曇が思いつくまま並べた言葉を、ヒスイは次々と文字にしていく。

はな、つち、みず、あめ、うみ、ふね、さかな……。

そこまで並べて、理曇はふと昔を思い出した。

「ヒスイ。水妖って、知ってるか？」

ヒスイはこくりと頷いた。

「誰にも話さないと約束できるのなら、とっておきの内緒話を教えてやろうか」

よほど興味を感じたのか、ヒスイは身を乗り出して、こくこくと頷いた。

「ずいぶん前のことなんだが、ここで水妖を飼っていたことがあるんだ。まだ幼い水妖だったが、とても綺麗だった。泳ぐ度に、虹色の髪がふわふわ広がって……」

言葉を尽くしても、あの美しさを表現しきれない。あの美しい姿は、今でも容易に思い出すことが出来るというのに、うまく伝えることが出来ないのが、ひどくもどかしかった。

話の続きをねだるように、ヒスイは理曇の服の裾を引っ張る。

「水妖というのは、妖とは違って、自然の気が凝り固まって生まれた生き物だから、よほどのことがない限り、人を襲ったりすることはないんだ。だけど、飼うときには万が一の用心のために、妖力を封じてしまうんだ。あの水妖は、可哀想に、声を出すことすら出来ない有様だった。あまりに可哀想で、俺は、水妖を海に帰してやることにしたんだ。真夜中に、水妖を抱いて海まで走って……」

抱いた腕の中で、水妖は苦しそうに喘いでいた。死んでしまいはしないかと、不安でたまらなかつた。

海へ辿り着き、無事に水へ帰してやれたときは、どれほどほっとしたか。

「あの時俺が水妖を運び出したんだって事は、まだ誰にもばれちゃいない。子供の頃から悪知恵はあったからな。だから、この話は誰にも内緒だぞ」

ヒスイは大まじめ顔で頷いた。

「自分が逃がしてやったくせに、俺、翌朝はわんわん泣いちゃって。だから、誰も俺がやっただなんて疑わなかったんだろうな。でも、二度と会えなくなったんだって事が辛くて……」

ふと気付くと、ヒスイはじっと、理曇の顔を見つめていた。

「子供の頃の話だよ」

恥も外聞もなくわんわん泣いてしまった、あの時の自分を思いだした理曇は、照れ隠しに、無理矢理両手でヒスイの顔を背けさせた。

いやいやをする子供のように暴れるヒスイの頭を抱え込んで、押さえつける。

「あの水妖、また、人に捕まったりしてなきゃいいんだけど」

ひとしきりじゃれた後、理曇は思いだしたように呟いた。

「そういえば、あの水妖、お前のような緑の瞳をしていたっけ」

頭を理曇に抱え寄せられたまま、ヒスイは俯き、一瞬表情を陰らせた。

理曇があ那时的ことを覚えていてくれた。それが解っただけでも、震えてしまいそうなくらいに嬉しかった。

だけど、あの時の水妖と今のヒスイとは、あまりにも違いすぎた。同じなのは瞳の色と、声を出せないことくらいだった。

声を出すことの出来ないヒスイには、自分があ那时的水妖だと伝える術がなかった。話したところで、理曇が信じてくれるかどうかは解らない。もしかすると、妖だとヒスイを恐れるかもしれない。

理曇を想って、水妖の姿を捨て、虹色の髪を奪われ、それでもヒスイは陸へ上がった。しかし、こんなに近くにいながら、ヒスイには想いを理曇に届ける術がなかった。

ひどく切なく、胸が痛かった。

その日の夕食の席で、理曇は、翌日、王都へ戻ると家族に告げた。

「で、ヒスイ、お前はここに……」

残れという言葉を書くより先に、ヒスイはわっと泣き出し、激しく首を振った。

「ヒスイ。お前、やっとここに馴染んだんだから、今更王都へ行って、不自由な暮らしをすることもないだろう？ 俺にも仕事があるから、お前の相手ばかりもしてられないし」

いくら言っても、ヒスイは激しく首を振り、泣くばかりで、理曇の言葉を聞こうとはしない。

「こら、ヒスイ。人の話を聞け」

「およし、理曇。こんなに小さな子を苛めるのは」

「苛める……？」

間に入った真暁の言葉で、頭が冷えた。

真暁に抱きしめられ、背中を叩いてもらい、ようやくヒスイは落ち着きを取り戻した。

「この子がこの家に慣れたのは、あんたがいたからだろう？」

「それはそうだろうけど。王都では、いったん仕事に就いたら、三月も家へ戻れないことだってあるんだ」

「ここへは半年も一年も、戻ってこないことだってあるだろう？」

親不孝な息子としては、言い返す言葉がなかった。

「それに、あんたが精一杯頑張れば、三月の仕事も二月で片づけようとすれば片づくんじゃないのかい？ それに、どうしたいかは、先に本人に聞いてやるのが筋だろう？」

真暁の言葉はもっともだった。

「ヒスイ、お前、どうする？」

席を立て、腰をかがめるようにして、真暁にしがみついているヒスイに問いかける。

「王都へ来れば、ずいぶん寂しい思いをしなければならないんだぞ。ここにいる方がずっといいと俺は思うが」

涙の滴を睫毛にぶら下げたまま、ヒスイは首を振った。

「俺と、来るのか？」

ヒスイはしっかりと頷いて見せた。

「王都までは三日掛かる。途中、片づけなければならない用もあるから、乗り物は使えない。ずっと歩かなければならないんだぞ。それでもいいのか？」

ヒスイは頷く。途中で泣いたら放って行くと言っても、それでもついて行くという。

「理囊。連れていっておやりよ」

足手まとい、などとは、可哀想で言えやしなかった。

「しょうがないな」

とうとう理囊は折れた。ヒスイを拾ったのは自分なのだから、最後まで責任をとらなければならない。

「途中で泣いても知らないからな」

赤茶の髪の手を押しえつくと、ヒスイはその手に両手でそっと触れ、微笑みながら頷いた。この笑顔にひどく弱い自分を、理囊は自覚した。

「こらあっ！ 足を見せて見ろ」

ヒスイは理囊の腕をすり抜けて、逃げ回る。それを理囊が追って、部屋の中は大騒動だった。どうにかこうにか捕まえ、部屋の隅の寝椅子に、無理矢理座らせる。

「ああ、やっぱり……」

靴を脱がせてみると、案の定、ヒスイの足は肉刺だらけ、しかもつぶれてしまっていて、見る目にも痛々しい。

何も言わないので歩かせては見たが、やはり無理をしていたようだ。

「途中で言えばよかったんだ」

ヒスイは、俯いていた。

途中で言い出せなかったのは、泣き言を言ったら置いて行くと言ってしまったせいだ。解っているから、理囊はそれ以上、強く言うことは出来なかった。

ため息を吐きながら、理囊はヒスイの手当をしてやる。

三日で王都に着く予定だったが、残り二日の行程を、三日かけて歩くことにした。それならば、少しはヒスイの負担も楽になるだろう。

ついでとばかりに、凝り固まってしまっているふくらはぎをもみほぐしてやる。

よほど疲れていたのか、ヒスイはいつの間にか居眠っていた。それを見る理囊の顔に、知らず、笑みが浮かんだ。

それにしても、ヒスイの足は、今まで全く歩いたことがないのかというくらいに弱い。あつという間に肉刺は作るし、筋肉が疲労する。

ちょうど、深窓の姫君ならば、こんな足をしているかも知れないなどと、理囊は思った。

……ただ一人知っている、本物の深窓の姫君の足を、直に見たことはなかったが。

起こすのは可哀想で、このままそっとしておくことにした。

しばらくして、宿屋の者が食事が出来たことを告げに来た。ヒスイを起こし、一階の食堂へ降りたのだが、ヒスイはまだ眠いらしく、ともすれば食器に顔を突っ込みそうになる。

「ヒスイ。食べるか眠るか、どっちかにしろ」

言われてすぐは目を開いているが、すぐに頭が傾く。空腹が満たされるほどに、眠気が増すらしい。半分ほど食べた辺りから、眠気が勝って、なかなか食事が進まなくなった。

「ヒスイ。こっちへおいで」

隣に座らせ、理曇の膝を枕にして寝転ばせると、ヒスイはすぐに寝息を立て始めた。

「おやおや、眠ったのかい？」

宿屋の女将は、ヒスイの顔を覗き込んで笑った。

「弟は旅が初めてだから、疲れたのだろう」

余計な詮索を避けるために、ヒスイのことは弟だということにしてあった。

「それにしても可愛い顔だねえ。本当に、男なのかい？」

隣の席の男が、首を突っ込んでくる。

「ああ」

「似てない兄弟だなあ」

十日ほど前に拾った子供が、弟であるはずがない。茶色の髪に鳶色の瞳の理曇と、赤茶の髪に緑の瞳のヒスイが、似ている方が奇妙だろう。余計なお世話だが、ここで事を荒立ててもしょうがない。

「義理の母の連れ子だ。両親がどちらも亡くなったので、俺が引き取ることにしたんだ」

健在の両親には申し訳ないが、嘘も方便という言葉もある。

「どこぞのお大尽に献上できそうじゃないか。ああ、王都警備隊の第七隊に入れてやるっていうのはどうだい？」

危うく、飲みかけた酒を吹くところだった。ひどく咽せてから、何だそれはと聞き返した。

「王都警備隊第七隊ってのは、美男美童が揃っていて、王の寵愛を受けているそうじゃないか。この子なら間違いないよ」

何が間違いないと言うんだ。

確かに第七隊は、王の直属で動いていたし、特別扱いもされている。公式行事に表立って出てくることもないが、その認識は大きく間違っている。

訂正したいが、ここで自分の身分を明かすわけにもいかなかった。

ヒスイが可愛らしいというのは、認めなくもないが。いや、顔だけでなく、仕草などもずいぶん愛らしいが。

「悪いな。部屋へ戻るよ」

すっかり眠ってしまっているヒスイを楽々と抱き上げ、理曇は席を立った。

夜半過ぎ、眠っているヒスイを残して、理曇は宿を抜け出した。

念のため、ヒスイのためには、置き手紙を残してある。

『かならずもどってくる。ここでまっている』

仮名ばかりの置き手紙だ。読めないはずはない。理曇の言いつけは必ず守る子だから、途中で目が覚めても、ちゃんとおとなしく待っているだろう。

ヒスイを信じることにして、理曇は自分の仕事を片づけることにした。

周辺警備隊の目を盗んで、街の外へ出る。見つかったところで、自分の身分を明かせば、咎められることはないだろうが。

――いや、別の誤解を受けるかもしれない。

ついさっき聞かされた、あらぬ誤解を思い出し、理曇は顔をゆがめた。

辺りに人影はなかった。妖の活動が活発になる時刻に、好きこのんで散歩するようなバカは、理曇以外にはない。

理曇の足取りは、目的がないように見えた。夜歩きが趣味と言い切るには、気配が殺気立っている。

理曇の目的は、この時間に、街の周辺にどの程度の妖が、どのくらい出没するか確認することだった。

いくらか歩いて、理曇はふと、足を止めた。

暗闇に、一對の赤い光が浮いていた。

――毒虫か？

外見はムカデに似ているが、子供の背丈ほどもあり、触手には毒がある。触手にさえ触れなければ、たいした敵ではない。

剣を抜いた理曇は、一閃、毒虫を切り捨てた。

上下二つに分けられた毒虫は、体液を辺りにまき散らしながら、息絶えた。

この程度の妖ならば、ちゃんとした妖避けの護符さえあれば、避けて通る事が出来る。

この程度の妖で済めばいいと心の底で願いながら、理曇は足を進めた。

真っ暗な闇の中で目を覚ましたヒスイは、自分がどこにいるのか咄嗟に解らなかった。

夜の海の底にいるような気がしたが、肌に触れる感触は、海の水の優しさではなかった。

ようやく自分がどこにいるのか思いだしたヒスイは、手探りで理曇を探したが、すぐそばに理曇の気配はなかった。

体を起こして部屋を見回したが、やはり理曇はいなかった。

荷物はそのままだったが、剣はない。理曇が部屋にいないことは明らかだった。

卓の上に燭台があり、眠ってるヒスイの妨げにならないよう、ほのかな明かりが点してあった。すぐそばに、一枚の紙が置かれている。

起きあがったヒスイは、それを手に取った。

理曇の文字だった。

必ず帰ってくると書かれてはいるが、ちゃんと言葉で約束した訳ではない。

もしかすると、娼館へでも行ったのだろうか。それとも、足手まといでしかない自分は、置き去りにされたのだろうか。

王都へ付いて行くと泣いたのは、無理を言って、理曇を困らせたかったわけではない。ただ、少しでも理曇と一緒にいたかっただけだ。

もう、理曇は戻ってこないかもしれない。

――そんな事はない。必ず戻ると、理曇は置き手紙を残していった。きっと理曇は帰ってくる

。理曇を信じると決めたヒスイは、寝台に戻り、縁に腰掛けた。もう一度眠る気には、とてもなれなかった。

包帯の巻かれた足を見つめていると、涙がこぼれた。

さっきまでの眠りの中で、ヒスイは夢を見ていた。陸へ上がってから、何度も繰り返し見た夢だった。

夢の中のヒスイは、薬の小瓶を手にしていた。もう一度理曇に会いたい一心で手に入れた、陸へ上がるための薬だった。

震える手で薬を飲み干した途端、下半身の感覚は失せ、喉は灼けるように熱くなった。そのまま、ヒスイは意識を失ったらしい。気付いたときには、ヒスイは浜辺に打ち上げられていた。しっかり握っていたはずの薬の小瓶も、いつの間にか消えていた。

身体の感覚が戻らず、ぼんやりしている時に、あの男に会った。いきなり襲われ、何がなんだか解らないうちに大きな体にのしかかられ、初めて危険だと察知することが出来た。

恐怖に身を竦めたヒスイの身体の上で、男はいきなり、彫像のように動きを止めた。

『行け。早く』

その時、ヒスイの耳元で声が聞こえた。確かに、魔法使いの声だった。

『真っ直ぐ走って行くんだ』

何が起こったのかは解らない。ただ、魔法使いの声を信じて、ヒスイは走った。

そして、理曇に出会ったのだ。

あの時の出来事を、ヒスイは繰り返し夢に見ていた。

きっと魔法使いがヒスイを助け、しかも理曇に会わせてくれたのだ。海のすぐ側にいたから、魔法使いの力が届いたのだ。

江都の街を離れるという事は、海から離れることだった。

海から遠ざかるにつれ、ヒスイの心に不安が増した。いつか薬の効力が失せて、元の水妖に戻ってしまうのではないか。もしそうなった時、理曇はヒスイをどうするだろうか。小さい頃のように、水槽に閉じこめられてしまうのだろうか。

きっと、海からは遠い王都までは、魔法使いの力は届かない。助けてもらうことは出来ない。理曇がいなければ、ヒスイは何もできないのだ。頼れる者は、理曇しかいないのだ。

不安に押しつぶされそうになりながら、ヒスイはただ、理曇を信じて待っていた。

それからの半刻は、ヒスイにとっては、永遠に近い長さだった。

帰ってきた理曇を見るなり、ヒスイは理曇の胸へ飛び込み、泣きじゃくった。

理曇の胸に顔を押しつけるように泣いていたヒスイは、はっと顔を上げ、理曇の顔を見つめた

。

理曇の身体に、血の匂いを感じたのだ。

「置いて行かれたと思ったのか？ 手紙があっただろう？」

ヒスイは頷き、また、わっと泣き出した。

ヒスイは、理曇がどこへ行っていたのか、なぜ妖を斬ったのか、問うことは出来なかった。感

じた血の匂いに混乱し、ただ、泣く事しかできなかった。

胸にしがみついてしゃくり上げているヒスイの髪を、理曇の手が撫でる。

その手も、声も、いつもと変わらず優しいのに、ヒスイは理曇が怖くてたまらなかった。それでも、ヒスイが縋れるのは、理曇しかいなかったのだ。

「悪かった」

もっと早くに、ヒスイに自分の仕事について話しておけばよかったと、理曇は後悔した。こんなにもヒスイを不安にさせてしまったことが、悔やまれた。

「明日になったら、ちゃんと訳を話すから。今夜はもう寝よう」

そう広くない寝台に、二人で転がった。

ヒスイは理曇の胸に顔を押しつけるような体勢を作り、きゅっと服の裾を掴んだ。

「もう、どこへも行かないから」

その言葉が信じられないのか、胸に押しつけられた頭が、左右に揺れる。

どうにか落ち着いて、寝息を立て始めても、ヒスイの手は理曇の服の裾から外れなかった。

――明日はちゃんと話をしよう。

そう心に決めて、一つあくびをこぼした理曇は、ヒスイと同じ眠りの中へ落ちていった。

翌日、王都への道中、理曇はヒスイに、いろんな事を話して聞かせた。

理曇が王都警備隊に属していること。王の手足となって各地を回り、それぞれの土地の様子を調べ、王に報告するのが第七隊の仕事だということ。休暇中とはいえ、江都と、その村や道中の様子のある程度確認しておかなければならないことを、事細やかにヒスイに話した。

ヒスイは事情を理解したものの、夜中に理曇が宿を抜け出す時には必ず目を覚まし、出て行く理曇を不安げに見ていた。

眠れなくても、ちゃんと目を閉じて寝台に転がっていると置いて、理曇は出て行く。その言いつけはちゃんと守ってはいるが、理曇が戻るまではやはり眠れないらしい。戻って来た理曇を見て、ほっとして笑い、やっと本当の眠りにつく。

待つ人がいる事の本当の意味に、理曇は気づき始めていた。

「よう。やっと戻ったか？」

王都へ戻るなり、理曇を訪ねてきたのは、第七隊の隊長、レンだった。

この男は、『飛廉』という、風の神と同じ名を持っていたのだが、その名は大仰すぎて似合わないからと、勝手にレンと名乗っていた。剣の腕もなかなかで、人望もそれなりに厚い。

「何やら、大きな拾い物をしたらしいな」

どこで聞いてきたのやら、レンはすでにヒスイのことを知っていた。

「もしかして、それか？」

理曇の服の裾を掴んで、背後に隠れているヒスイを指さした。

「これです」

「可愛いじゃないか」

二人の男に挟まれて、ヒスイは不安げに二人の顔を見比べる。

「もしかして、もうやっちゃったのか？」

「何をバカなことを言ってるんですかー!？」

意味も分からないまま、ヒスイは不安げに、声を荒げた理曇を見上げる。何でもないと言ってやっても、その表情から不安の色が消えなかった。

「この子の前で変なことを言わないでください」

「ずいぶん可愛がっているんだなあ〜」

レンはヒスイと瞳を近づけるようにして、腰を折り曲げた。

「俺はレンだ。よろしくな。名前はなんて言うんだ？」

差し出された手に、ヒスイは文字を書いた。

「ヒスイか。いい名前だな」

誉められたヒスイは、にっこりと微笑む。

「いい笑顔だ。可愛いなあ」

子猫を撫でる手つきで、レンはヒスイの頭を撫でる。ヒスイはくすぐったそうに首をすくめながら、笑った。

「遼義が、理曇が戻ったら会いたいと言ってた。羅紗がちびちゃんに会いたがっているから、一緒に連れて来いってさ」

王都に着いた早々、ヒスイを一人にしてしまうのは気が引けた。遼義はその思いを先読みして、そう言ってくれているのだろう。

レンも一緒に行くというので、待たせておいて、ヒスイに支度させた。

「それにしても、何人の女が泣くかなあ」

大声で呟かれた独り言に、一瞬、理曇は硬直した。

「何を言ってるんですかあっ!」

慌てて口を塞ごうとしたが、レンはひらりと逃げてしまう。

「ほら、なんて名前だったっけ？ 掃除やら洗濯やらに通ってきてる女がいたよなあ。あれ？」

一人じゃなかったよな。確かこの前、女同士が鉢合わせして、大騒ぎになって……」

確かに、理曇の住まいは、男の一人暮らしとは思えないほど、きちんと片づいていた。理曇自身がマメな訳ではない。やってくれるのは女だ。それも一人ではない。

しかし、どの女に対しても、理曇は特別な感情を持っているわけではない。女達が、勝手にやってきて、勝手に片付けやら選択をしてくれる、理曇はそれを放っておいただけだ。

そういうことは、なぜかヒスイには知られなくなかった。

「ヒスイの方が、よっぽど可愛いもん。あいつら、鏡を見たら、二度とここへ来ようとは思えないだろうなあ」

「レンっ！」

「あっ。ヒスイ～～」

殴ってやろうと上げた手が、その一言で止まった。別の部屋で着替えて戻って来たヒスイの背後に、レンは逃げ込んでしまった。

「理曇が俺を苛めるう～～」

何があったのかと、ヒスイは理曇とレンを交互に見つめる。幸いにも、さっきのやりとりは聞かれていなかったようだ。

「何でもないよ。行こうか」

「いやあん。俺も連れてってえ～～」

無視して歩き出した理曇の背中に、レンはぶら下がった。

第七隊の中で一番若い理曇を、レンが可愛がってくれているのだということは解る。解るが、彼の可愛いがり方には大きく問題がありすぎる。想い人に対してもこの調子だからうまくいくはずがない。その腹いせが、周りに飛び火する。悪循環もいいところだ。しかし、相手は一応自分の上役なので、何も言えないのが悔しい。

表通りへ出たところで、運の悪いことに、顔見知りの女に出くわしてしまった。理曇が戻ったことを聞きつけて、やってきたのだろう。

女は何も言わず、こわばった表情でヒスイを見ていた。

男の格好をしているっが、それでもヒスイは女に見えてしまうほど、愛らしい顔立ちをしている。

女は何も言わないまま、理曇達に背を向けた。理曇も、後を追いかけてはしない。

「あの子、泣いてたんじゃないのか？」

そっと、レンが耳打ちする。

しかし、追って行ってやることも、余計な情はかけてやることも出来ない。あの女は、理曇の『女』ではないのだから。

「あの子、ちゃんと解ったのかな？ 理曇は男にしか興味ないって」

……。

レンの背後に、理曇は握り拳を隠す。

本気で、この男を背中から叩き斬ってやろうと思った。実行には移さなかったが。

不安げに、ヒスイは理曇を見上げる。

「何でもないよ」

赤茶色の髪に手を乗せてやると、ヒスイは小さく頷いた。

「待ってたのよ。いらっしゃい」

羅紗に迎えられたが、ヒスイは理曇の服の裾を掴んだまま、背後から出てこようとしない。その様子は、羅紗を怖がっているようにさえ見えた。

「そんなに私が怖いかしら……。解らなくもないけど」

聞き取れなかった言葉尻を聞き返すと、羅紗は何でもないというように首を振った。

玉座に就く者は、神から不思議な力を与えられると言う。遼義も羅紗も、常人にはない不思議な力を持っていた。この二人と話をすると、時折、謎めいた言葉が出てくることがある。が、その理由が明かされることは、まずない。

このときもまた、『解らなくもない』について説明されることはなかった。

「向こうにお茶の用意が出来てるわ。どうぞ」

中庭を見渡せる露台上に席が設けられており、王、遼義は、異国の昔語りを読みながら、理曇達を待っていた。

「よく来てくれたね」

遼義は笑って理曇達を迎えた。しかし、やはりヒスイは遼義をも怖がって、理曇の背後から出てこない。仕方がないので、理曇とレンの間に座らせることにした。

「で、お前、何を読んでるんだ？」

遼義の手元を覗き込むなり、レンは苦い顔を作る。

「他国のことに興味を持つ暇があるんなら、自分の国をもっと何とかしろよ」

「確かにそうだね。そのためにお前達がいてくれるんだろう？ いつもいつも、感謝しているよ」

遼義はにっこりと微笑む。

彼の笑顔には、時々毒が含まれている気がする。ほんの時々ではあるが。

「あーあ。そーやって、俺達はまた、こき使われちゃうんだよな」

レンは大きめに叫んで、頭を抱えた。

王都警備隊第七隊は、王から特別な扱いを受けているが、決してそれはよい扱いではない。

その中でも一番ひどい目に遭ってるのは、レンだろう。隊長なのだからという理由だけで、きつい仕事は真っ先にレンに与えられる。この二人は、遼義が玉座に就く以前からの仲なので、全くといってよいほどに遠慮がない。

――一番可愛がられてるけど、一番いたぶられてるのもレンだよな。

二人のやりとりを伺いながら、理曇は思った。

「お仕事の話は後にして、先にお茶にしましょ」

王妃手ずから入れられたお茶は、西の楓国特産の、紅い色をした茶だった。

羅紗が菓子を勧めても、ヒスイは口を付けようとしない。

「緊張してるのか？ こいつらは王と王妃といっても、そんなに緊張しなきゃならないような人

間じゃないぞ」

口に焼き菓子を放り込みながら、レンが言う。その言い方もあんまりだと思うが。

「ヒスイ。口を開けて見ろ」

理曇が言うと、ヒスイは素直に口を開いた。焼き菓子の欠片を放り込んでやると、一瞬ぎょつとしたものの、味が解るなり表情を和らげた。

「美味しいだろう？」

ヒスイは頷いた。王や王妃が口にする食べ物だ、不味いはずがない。

「甘い物は好き？ なら、理曇、お茶に砂糖を入れて上げて」

「そうですね」

理曇はヒスイにやらせようとしたが、羅紗は意地悪だとか何とか文句を並べて、理曇にさせようとする。仕方なく、理曇は言うとおりにした。

「で。理曇。久しぶりの江都はどうだった？」

「あら、もう、お仕事の話なの？」

雑談もそこそこに、切り出した遼義に、羅紗は口を尖らせた。

「悪いが、後は頼む」

「解ったわ」

優雅に、小さく肩をすくめて、羅紗は立ち上がった。

「ヒスイ。男の方々は、難しいお話がしたいんですって。あちらへ行きましょう」

優しい声で誘っても、ヒスイは動こうとしない。不安げに、理曇を見つめている。

「ヒスイ。行っておいで」

「遠くへは行かないから。あの噴水のところまで。声は聞こえないけど、ここは見えてるから大丈夫よ。理曇が勝手に帰ってしまわないか、ちゃんと見えるわ」

中庭の中央にある噴水を、羅紗は指さした。

「何かあれば理曇には解るわ。すぐに飛んで来てくれるわ。ねえ、理曇」

「ええ、もちろん」

王と王妃を守るのは、王都警備隊に属する理曇には、当然の任務だった。

しかし羅紗は、そうではないと首を振る。

「理曇。あなたの言葉で、ヒスイに約束して上げて」

何を考えて、羅紗がそう言ったのかは解らない。しかし、理曇には解らない何かを知っていて、それを根拠に言っていることだけは間違いなかった。

「ヒスイ。行っておいで。お前をおいて帰ったりはしないから。何かあったら俺を呼べばいい。お前が呼べば、俺には解るから」

その言葉に安心したのか、ヒスイはうなずき、羅紗に手を引かれて行った。

「お前が呼べば俺には解るから、か。いい台詞だなあー」

さすが女たらしの理曇だ、覚えておいて今度使わせてもらおうと、レンは笑っている。

やっぱり、さっき叩き斬っておけばよかったと、理曇は深く後悔した。

遼義は卓に肘を突いて顎を乗せ、何やらにこにこしている。この王もまた、何かを知っている

に違いないのだが……。

理曇はそっと、ため息を吐いた。

「ヒスイ。こちらへ来て座らない？」

いつまでも、落ちてくる水の滴を眺めているヒスイに、噴水の縁に腰掛けた羅紗が声を掛けた。ようやく顔を向けたヒスイに、隣に座るようにと指し示す。ヒスイは、おずおずと従った。

「私が怖い？」

答えは聞かなくても、表情を見れば明らかだった。羅紗はくすくすと笑う。

「何もしないって約束するわ。それに、何かあったら来てくれるって、理曇は約束してくれたでしょう？」

ヒスイは羅紗の顔を見つめたまま、小さく頷いた。

「理曇には内緒のお話よ。さあ、手を出して」

差し出された手に、ヒスイはおそるおそる手を重ねた。

「喋るときのように考えれば、私には解るから。嘘はつかないで、ちゃんと話してね」

羅紗は微笑んだ。

もしかすると、最初に感じたほど、怖い人ではないのかも知れない。ためらいながらも、ヒスイは頷いた。

「どうやって、人の姿を手に入れたの？」

その問いに、ヒスイは思わず手を引いた。

優しい声であるにもかかわらず、聞かされた言葉の内容は、とても恐ろしいものだった。羅紗には、ヒスイがどこから来たのか解っていたのだ。

確信はないものの、それを漠然と感じていたからこそ、ヒスイは羅紗を怖がったのだ。

「何もしないと約束したでしょう？」

羅紗は小さく首を傾け、優しい瞳でヒスイを見つめていた。

「私も遼義も、あなたが人の命を狩るためにここへ来たのではないことは解っているわ」

差し出された手のひらと、羅紗の顔を、ヒスイは交互に眺めた。

その言葉を信じて、羅紗の手のひらに手を重ねた。

《魔法使いに薬をもらったの。石と宝珠と、髪を渡して》

ヒスイは唇を噛んだ。髪を奪われたときの屈辱は、まだ失われてはいない。

「どうしてこんな所へ来たの？ ここはあなたにとって住み良い場所じゃないでしょう？」

《もう一度、理曇に会いたかったの》

「理曇に？ もう一度？」

《小さい頃、人に捕まったことがあったの。それを逃がしてくれたのが理曇だったわ。理曇は、妖力を封じられていたあたしの声を聞いてくれた。でも、別れ際、ありがとうっていう事が出来なかったの。だから、もう一度会いたくて……》

「それで、ここへ来たのね？」

ヒスイは小さく頷いた。

「でも、理曇はあなたのことを知らないのでしょうか？」

《それでも、理曇に会いたかったの……》

涙を浮かべて俯いたヒスイの肩を、羅紗は抱きしめた。

「もしかすると、まだ、あなたの身体は、子供のままじゃないのかしら？」

ヒスイは俯いたまま、頷いた。

「だから、理曇はあなたが男の子だって信じているのね」

困ったわね……と、羅紗はため息を吐いた。

「まだ、体ができあがってないまま、理曇に出会ってしまったのね。でも、あなたは、これから大人にならなきゃいけない。男になるか、女になるか、自分で決めなきゃならないわ」

人の姿に近い半妖は、両性具有の生き物として生まれてくる。やがて成長し、ある程度の大きさになると、自らの性を決めるという。

「恐らく……、あなたは女になるのでしょうかね。理曇のことが好きなのでしょう？」

頷いたヒスイの膝に、ぱたぱたと大粒の涙の滴がこぼれ落ちた。

「好きになればなるだけ、大人になるのが早くなるのでしょうか？ 変化が始まってしまわないうちに、海へ帰った方がいいと思うのだけれど……」

羅紗の言葉を最後まで聞かず、ヒスイは激しく首を振った。

「今ならまだ、海へ戻ることだって出来るわ」

《あたしは、理曇と一緒にいたいの》

ヒスイの心の声は、想いの激しさを伴って羅紗に届いた。その激しさ、深さは、ヒスイの胸の痛みと同じだけの痛みを羅紗に与えた。

「声は、魔法使いに封じられたのね？」

《薬と引き替えに、盗られたの》

「そうじゃないの。人の姿を借りる魔法は、声を出してしまうと、二度と元の世界に戻れなくなるの。だから、魔法使いはあなたの声を封じてしまったの。優しい魔法使いよ」

《二度と戻れなくても構わない。理曇と一緒にいられるのなら、あたしはそれでいい。あたしは、ちゃんと理曇と話せる方がいい》

「ヒスイ……」

《お願い。声を取り戻す魔法を知ってるのなら、私に魔法をかけて。どんなことだってするから》

身を乗り出して、ヒスイは詰め寄った。

ヒスイは本気だった。

「あなたはそれでも構わないでしょうけど、理曇はあなたの変化をどう思うかしら。理曇は、あなたが男の子だって信じているのでしょうか？」

地上に上がって、見知らぬ男に襲われかけたとき、理曇が助けてくれた。あの時、ヒスイは裸だった。両性具有の生き物とはいえ、外見には男の特徴の方が大きく現れていた。理曇がそう信じたのも無理はない。

「理曇は、あなたの変化を受け止めてくれるかしら」

《その時は理曇に斬ってもらわ。その方がずっといい》

それは、ヒスイの真実の思いだった。だからこそ、羅紗は胸が痛かった。

それ以上何もいう事が出来ず、羅紗は目を伏せた。

理曇の言葉に耳を傾けていたはずの遼義は、何を思ったか、唐突にため息を吐いた。

「どうしたのですか？」

「いや、何でもない」

笑って答えるが、遼義の表情は冴えなかった。

遼義は、密かに羅紗の意識に同調し、二人の会話を盗み聞いていたのだ。

――やはり、あの水妖の子に、説得は通じなかったか。

「あれは想いの激しい生き物だと言うし……」

遼義の独り言を気にとめたのは、理曇一人だった。レンはいつものことだと、欠片も気にしない。

「あれ、って何ですか？」

「今はまだ秘密だよ」

笑うばかりで、遼義は答えてくれない。こうなったら口を割らせることは出来ないだろう。追求は諦めることにして、話題を元に戻した。

「そういえば、途中で第七隊の噂を、とうとう直に聞いてしまいましたよ。ヒスイを第七隊に入れてやれって。王の寵愛を受けること間違いないって」

「それは面白いな」

「げーっ！ ぜったいに、俺は嫌だぞっ」

レンは顔を歪めた。理曇ももちろん、当然の事ながら、嫌に決まっている。

第七隊の面々は、この噂に閉口しているのだが、当の本人である王はなぜか面白がっている。やれば出来るはずなのに、噂を揉み消そうとはしない。もしかすると、第七隊の正体を不明にするために、意図して噂を流しているのかもしれない。この王ならばやりかねないと、理曇には思えてしまう。

「ところで理曇。その、ヒスイのことだが」

どうするつもりだと、王は問う。

「身元が分かれば、親元へ帰してやるつもりです」

「解らなければどうする？ 一生、面倒を見てやるのか？」

「拾ってしまった責任がありますから。一人前になるまでは、何とかしてやろうと思っています」

「一人前とは、つまり大人になるまで、という意味だな？」

「ええ」

江都では、ヒスイの身元に関して何の手がかりも得られなかった。あれだけ手を尽くして見つからなかったのだから、この先もどうなるかは解らない。ヒスイを王都に連れてきたとき、せめてヒスイが自分の食い扶持を稼げるようになるまでは面倒を見てやろうと、その覚悟はしていた

。

「この先、ヒスイはどのように変わるか知れない。それでもか？」

「ええ」

「そうか……。もし、ヒスイが女だったならどうした？ 抱いてやったのか？」

初めて聞かされた、王の露骨な言葉に、理曇は額を卓に打ち付けそうになった。驚いたのはレンも同じらしく、派手に紅茶を吹き、咽せかえった。

「ヒスイは男です」

「だから、例えばの話だ。お前の女にしてやったのか？」

表情も変えず、王は理曇に問いかけた。からかいの色は全く含まれていない。

「解りません。想像もつきません」

「そうか……」

遼義は小さなため息を吐いた。

「あの子には、魔道がかけられている。声を失ったのはそのせいだ」

「やはり……」

江都の街で、ヒスイを医者に見せた折りも、そうではないかと言われた。遼義が言うのならば、確かだった。

「じゃあ、ヒスイは魔道師なのですか？」

声を封じる魔道は、普通、魔道を封じるために施される。声を封じて、呪文を唱えられなくするのだ。

「そうではない」

「やっかいごとに首を突っ込んで、口封じされたとか？」

レンが口を挟む。

「恐らく、そうではないな。要因は他にある」

「魔道を解いてやることは出来ないのですか？」

「出来なくはない。しかし、今は解いてやれない」

今は、と王は言う。解けくない魔道ならば、なぜ、今ではいけないと言うのだろう。

「そんなに難しい魔道なのですか？」

「魔道自体は、大したことはない。その後の結果を、理曇、お前がちゃんと受け止めてやれるのならば、な」

「俺が……、ですか？」

王はじっと理曇を見つめていた。その瞳には、どんな未来が見えているというのだろう。

「解いてやってください。このままではヒスイが可哀想です」

「今のままの方が幸せかもしれないぞ」

そんなはずはない。

言おうとしたが、声にすることは出来なかった。確実に、遼義は理曇の知らない何かを知っているのだ。

「ま、しばらく様子を見ることにしたら？ どうしたいか決めるのはヒスイ自身なんだし。お前

の覚悟さえつけば、魔道は解いてやるって、遼義は言ってるんだし」

レンの呈示した案は、確かに、それが一番もっともな妥協案だった。

普段どれだけおちゃらけていようと、レンは必要な時に、一番必要な行動を見つけだせる男だった。だから第七隊の隊長として、信頼できるのだ。——本当に、普段はめちゃくちゃで、どうしようもない男なのだけれども。

「もう、お話は済んだ？」

頃合いを見計らっていたのか、ヒスイを連れて、羅紗が戻って来た。

ヒスイのさんざん泣いて腫れた瞼は、羅紗の癒やしの手によって、すでに癒やされている。ヒスイは、泣いたことを理曇に知られたくなかったのだ。

ヒスイは、右手に袋を握っていた。理曇の袖を引っ張り、中味を見せる。

袋の中味は、ヒスイの大好きなガラス玉そっくりの、色とりどりの大粒のあめ玉だった。羅紗にもらったのだろう。

「よかったな」

ヒスイは嬉しそうに、にっこりと笑った。

「お前、これが食べ物だって解ってるんだらうな？」

理曇は袋の中からあめ玉を一粒とりだした。

「ほら、口を開けて見ろ」

素直に従ったヒスイの口に、あめ玉を放り込んでやる。

ヒスイは、にっこりと理曇に笑い返した。

「お前ら、ほんっとに仲がいいなあ」

レンは、呆れた顔で二人を眺めた。

すべての事情を把握している王と王妃だけが、複雑に表情を陰らせていた。

ヒスイを王都に連れてきて、すでに二ヶ月。ヒスイの声を封じた魔道は、いまだ解かれていない。

解ける魔道ならば解いてやって欲しいと願っても、遼義はいまだ聞き入れてはくれない。

遼義は、ヒスイについて何を知っているのだろう。

理曇に何の『覚悟』が要ると言うのだろう。

声を失った本人でなく、なぜ、理曇に鍵があるのかが解らない。

しかし、それだからこそ、何とかしてヒスイに声を取り戻してやりたいと、理曇は思っていた。

ヒスイは床に転がって、いつか理曇が買ってやったガラス玉を自分の周りに撒いて、指で弾いて転がして遊んでいた。

このところ、ヒスイは一人でぼんやりしていることが多い。

「また、ガラス玉で遊んでいるのか？」

理曇が声を掛けると、ヒスイは慌てて起きあがった。にっこり笑ったのだが、その笑顔はどこかぎこちない。

「どうした？ 具合でも悪いのか？」

熱でもあるのかと手を伸ばすと、なぜかヒスイは身を引き、触れさせてはくれなかった。

「……？ どうしたんだ？」

何でもないとヒスイは首を振った。

「ほんっとに、どこか具合が悪いんじゃないのか？」

このところヒスイは、以前のように、理曇に甘えることをしなくなった。いつも触れられる距離にいるものの、甘えて懐にすり寄ってくることも、抱きついてくることもなくなった。一緒に眠ることもない。

嫌われるようなことは、一応、していないつもりだ。乱暴なことはしないし、よっぽどでない限り叱りつけることもない。

仕事で、二、三日家へ戻れないことはあるものの、断じて女のところへ行ったりはしていない。神に誓ってもいい。

「もしかして、俺が嫌いになったのか？」

このところのヒスイの態度は、そうとしか思えなかった。

しかし、ヒスイは今にも泣き出しそうな顔で、首を振る。

それでは、なぜこんなにも、依然と態度が違ってしまったのか、説明の付けようがない。

「それとも、何か、俺に隠してることがあるのか？」

はっと顔を上げたヒスイは、何か言いたげに唇を動かした。しかし、もちろん声は出ない。

きゅっと唇を噛んだヒスイは、顔を隠すようにして、理曇の前から逃げ出した。

「ヒスイ！？」

慌てて後を追ったが、ヒスイは寝台に潜り込み、頭からすっぽりと上掛けを被り、出てこようとはしない。

「こら、ヒスイ。顔を見せろ」

無理矢理上掛けを剥ごうとしたが、ヒスイはしっかりと上掛けの端を掴んでいて、離そうとしない。

先に、理曇の方が根負けしてしまった。

「解った。勝手にしろ」

立ち去ろうとすると、上掛けの下から伸びてきた手が、理曇の服の裾を掴む。

「――一体、お前は どうしたいんだ？」

答える代わりに、ヒスイは、掴んだ手にさらに力を込めた。

立ち去ることも出来ず、かといって無理に手を解くことも出来ず、理曇は寝台の縁に腰を下ろした。

理曇が手を解けなかった事に安堵するなり、ヒスイの瞳に涙が溢れた。

羅紗が言ったとおり、ヒスイの身体は変化を始めていた。自分でも戸惑うほどの急激さで、身体は女へと変わっていく。

触れられれば理曇に気付かれてしまいそうで、怖い。

だけど、本当は側にいて欲しい。自分が変わっていくことが不安でたまらないのだ。

いっそのこと、声を取り戻して、何もかもを理曇に打ち明けてしまおうかとヒスイは思っていた。人ではない、妖だと知れば、理曇はヒスイを斬るだろう。

理曇の手に掛かって死ぬるのならば、それでいい。

だけど、出来ることならば、一日でも長く理曇の側にいたい。

相反する二つの想いが、ヒスイの中でせめぎあう。

ヒスイが泣いていることに気付いた理曇が、小さな子供をあやすように、上掛けの上からヒスイの背中を優しく叩く。

理曇がすぐ側にいることを感じるだけで、幸せだと思った。

しかし、この幸せが長くは続かないことも、ヒスイには解っていた。

「……計都に、ですか？」

「そうだよ」

卓に肘を突き、顎を乗せたまま、遼義はにっこりと笑った。

「理曇に言ってもらうのが、一番いいと思うんだ」

計都は綏国の北のはずれにある、小さな街だった。そこへ行って、とある役人の不正に関する事実を確かめてきて欲しいと、遼義は言う。

計都へは、急いでも片道六日は掛かる。仕事を片づけて王都に戻ってくるためには、精一杯急いだとしても、一月は掛かるだろう。

「どちらかというと、その手の仕事は俺には向いてないと思うんですけど……」

「でも、理曇が行ってくれるのが一番いいと思うんだ」

「はあ……」

「ヒスイのことは心配しなくてもいい。ここで預かるよ。ちょうど羅紗が遊び相手を欲しがって

いたし」

——羅紗が？ 遊び相手？

「ここならば、妙な男に襲われるなんて事はないだろうし」

——なぜ、遼義がそれを知っているんだ！？ ……やはり遼義は得体が知れない。

「それに、ここではいろんな人間が、いろんな仕事をしているからね。いろいろ見るだけでも、ヒスイのためになるんじゃないかな。興味のある仕事が見つければ、教わるのもよいと思うし」

確かに、その提案は、ヒスイのためにはよいと思われた。

しかし、相変わらずヒスイとは、ぎこちない状態が続いている。今の状態でヒスイを放っておくのは、気が引けた。

だが……。

「行ってくれるね？」

遼義はにっこりと笑う。ヒスイのそばを離れたくはないが、王に逆らえるわけではない。

「……解りました」

そう答える以外、どうしようもなかった。

理曇が部屋を退出して、しばらく後、そうっと扉を開いたのは羅紗だった。

「遼義。うまく理曇を言いくるめてくれた？」

「まあね」

にっこりと笑った遼義に、羅紗はほっとしてみせた。

「理曇は、仕事の手を抜くなんて事はないからね。一月は王都に戻ってこないと思うよ。ヒスイはここで預かると言ったら、安心したようだし」

「そう。よかったわ」

羅紗は胸を押さえ、ほうっと息を吐いた。

羅紗は、以来ずっとヒスイを気にかけていた。だからこそ、ヒスイの身体の変化にも気付いていたし、理曇と翡翠の仲がぎこちなくなっていることにも気付いていた。

「あの子、日毎に自分を追いつめているんですもの。見てもらえないわ」

「たしかに、このまま放ってはおけないね。あの子は、思い詰めたら何をするか解らないし」

海へ帰らされるくらいならば、理曇の剣で斬られる方がいいとまで思い詰めているヒスイだから、放っておけば最悪の事態を引き起こしかねない。だから、物理的に二人の間に距離を置き、出来ることならば理曇のいない間にヒスイを説得し、海へ帰そうと思ったのだ。

「しかし、あの子が説得を聞いてくれるとは思えないけどね」

「それでも、何もしないよりましだと思うの」

つんと唇を尖らせた羅紗を、遼義は優しい瞳で見つめた。

窓から飛び込んできた白い鳩は、夕食の用意を始めていたヒスイの前で、一通の書簡に変化した。

羅紗が、ヒスイに宛てたものだった。

書簡には、理曇が一月ほど王都を離れること、その間、ヒスイは王城で過ごせばいいことを、

丁寧な、ヒスイにも解る文字で書き並べてあった。

――明日は、いつもの笑顔で理曇を見送ってあげなさい。

文末には、そう書き添えてあった。

手紙を握ったまま、ヒスイは自分の身体を抱きしめた。

きっと、理曇が王都に戻ってくる頃には、ヒスイの身体は変わってしまっているだろう。理曇に気付かれないはずはない。

ヒスイに向かって笑ってくれるのは、今日が最後かもしれない。

だからせめて、理曇がヒスイの笑顔覚えていてくれるように、今日は笑っていよう。そう思った。

「ヒスイ」

自分を呼ぶ声に、ヒスイは我に返った。いつの間にか、理曇が戻って来たらしい。

慌てて、こぼれた涙を拭き、羅紗からの手紙を戸棚に隠した。

「ここにいたのか」

都合のいいことに、目の前には刻みかけのタマネギが転がっていた。

「また、大きな目を見開いて、タマネギを刻んでたんだろう」

誤魔化すように微笑むと、そう、理曇は都合よく解釈してくれた。

ヒスイの頭を、理曇の手のひらが撫でる。

理曇は、言いにくそうに、明日から計都へ行くことをヒスイに告げた。王城へ行くことも、ヒスイはあっさりとして承した。

王や王妃の側ならば、身に危険が及ぶことは、まずない。たとえ理曇の身に万が一のことがあっても、後のことは王に任せることが出来る。

「ちゃんと、いい子で待ってるよ」

ヒスイは、理曇の言葉に頷いた。

なのに、なぜか不安が拭えない。

出来るだけ早く戻って来なければ。言い様のない不安を、理曇は胸の内に感じていた。

計都での時間は、ひどくもどかしく流れた。

仕事の内容は、大したことはなかった。北の杜国との交易品の横流しによる不正。国境に近い街では、よくある話だった。よくある分、どう動けばいいのか、手際も慣れていた。

それでも、事実を確認し、裏付けを取るには時間がかかった。確認の取れた事項を書状にし、王都へ判断を委ね、対応策を待つ間、さらに時間がかかった。

それでも、何とか仕事は片づいた。一月で戻るというヒスイとの約束は、どうやら守れそうだった。

今頃、ヒスイはどうしているだろう。一人で泣いたりしてはいないだろうか。ヒスイへの土産は、何がいいだろうか。

仕事を離れると、思うのはいつも、ヒスイの事ばかりだった。

もうすぐ、王都へ戻ることが出来る。

あと四日もすれば王都に着く、帰途上の出来事だった。

宿を取ろうとたどり着いた村は、何やら様子がおかしい。

旅人を装って、通りすがりの男に、どこか泊まれる場所はないか尋ねた。

「宿屋は、あるにはあるんだが……」

男は僅かに表情を歪め、通りの向こうを見遣る。

「何かあったのか？」

「そこの一番下の息子が、ついさっき、妖に攫われたらしい」

「妖に……？」

「恐らく、客を泊めるどころではないぞ」

妖が出たと聞けば、理曇の方も、ゆっくりと泊まるどころではない。

「宿は向こうか？」

行っても無駄だという男の忠告は、ありがたく無視することにした。

目的の宿屋は、行ってみればすぐに解った。家の周りには、野次馬と周辺警備隊の人垣が出来ており、中では攫われた子供の母親らしい女が、男に肩を抱かれながら泣いていた。

家の二階で一人でいた子供が、悲鳴とともに、妖に連れ去られたらしい。事情は、噂好きな野次馬の一人が教えてくれた。

警備隊は、これから妖が消えていった森で、妖狩りを行うらしい。

――この手口は、ただの妖ではない。大勢で行かせてはならない。

どちらかという、役人の不正を調べるよりは、妖退治の方が理曇の本職だった。

妖狩りを止めさせなければならない。咄嗟に勘が働いた。

理曇は、身近にいた警備隊員を捕まえた。

「ここの隊長は誰だ？」

「お前、何者だ？」

妖が出たことで、警備隊のものは皆、気が立っている。しかし、まともにやりあう暇が惜しかった。

「バカやろう。子供を連れ去った妖は、猿妖じゃないのか？ そうならば、相手は、何人いようと一度に幻覚を見せることが出来るぞ。人数が居た所で、幻覚を見せられて、同士討ちになるのがオチだ」

「まさか……？」

通りすがりの男が、なぜそれを知っているのかというように、警備隊員は理曇を見た。

「行けば何とかなるってもんじゃない。隊長のところへ案内しろ」

理曇の迫力に負けた男は、理曇を隊長のところへ案内した。

「妖狩りは、即刻中止しろ」

「何だ、お前は」

明らかに、自分より若い理曇の態度と物言いが気に入らなかつたのか、隊長はさらに横柄な態度で返す。

「俺は、王都警備隊の者だ。妖が出た状況を詳しく教えて欲しい」

身分証明となる、手のひらほどの大きさの、紋章入りの細工を見せた。

「王のご寵愛を受けている第七隊の者に、何ができるというんだ？」

鼻先で笑った男の言葉に、理曇は自分の感情を抑える事が出来なかつた。

「それは王に対する侮辱か」

相手の胸ぐらを掴み恫喝した理曇に、辺りは水を打ったように静まり返った。

「あれが、男を周りに侍らせて、色事にうつつを抜かす男だと思っているのか。お前達の王だろうが」

理曇の気迫に、男はやっとことの重大さ、己の失言の大きさに気付いた。

怒りを納めることは出来ないが、今は一刻も時間が惜しい。放り出された男は、無様に床に尻もちをつき、啞然と理曇を見上げた。

「子供がいなくなったのはどこだ？」

役に立たない隊長に代わって、隊員のうちの一人が、理曇を二階に案内した。

「ああ……。やはりな」

足下に、数本の白い毛が落ちていた。獣の毛に似ているが、そうではない。

「猿妖。しかも白猿だ、知っているか？」

問うと、理曇の背後についてきていた男は首を振った。

「猿の妖の中で、一番小賢しいヤツだ。白猿は体が小さいから、大人が襲われることは、まずない。犠牲になるのは、たいがい子供だ。猿妖には、獲物を別の場所に運んでから喰う習性がある。その場にいつまでもとどまっていると、かえって危険だということを知っているからな」

一階へと戻りながら、男に説明してやった。

「白猿は、幻術を使う。数を頼みに妖を狩ろうとしても、皆、幻覚に惑わされて、同士討ちになるのがオチだ。この村に魔道師は？」

「いいえ」

「いないのか。ならば、幻覚は破れないな」

理曇らの話を聞いていた母親の泣き声が高くなる。攫われただけならば、僅かであろうと子供が生きている可能性があるが、誰も行くことが出来なければ、諦めるより他にない。

「俺が行く」

旅装を解き、支度を始めた理曇を、一同は驚きの表情で見つめた。

子供を助ける事が出来るかどうかは解らないが、白猿をこのまま放っておくわけにはいかない。

「あんたは剣士なんだろう？」

「以前、猿妖は斬ったことがある。大丈夫だ。もし、朝までに俺が戻らなければ、王都に知らせてくれ。王がすぐに次の手を講じてくれるはずだ」

「しかし……」

「俺は大丈夫だ」

白猿は、人の心の一番弱い部分を突き、幻覚にするという。

幻覚に惑わされるほどの弱みは、自分の中にはない。だから、以前、猿妖を斬ることが出来たのだ。

惑わされるはずはない。

「後の事は任せたぞ」

情けないとはいえ、一応隊長を命じられている男に言い置いて、理曇は宿を出た。

妖が棲む森は、深い闇に包まれていた。一条の星明かりも、理曇の元には届かない。

己の感覚だけを頼りに、理曇は闇の中を進む。

不意に、血の匂いを感じた気がした。

近くに妖がいる。間違いない。

剣の柄に手をかけ、妖の気配を探る。

微かに、葉の擦れ合う音が聞こえる。

足音が、背後にゆっくりと近付いた。

振り返り、剣を抜こうとした。

しかし、理曇は剣を抜くことが出来なかった。

暗闇の中に『女』、が立っていた。小柄で、華奢な『女』だった。

理曇のよく知っている『女』だった。

微笑みを浮かべ、『女』は立っていた。

理曇の表情が緩む。

一瞬のうちに、理曇は、なぜ自分がここにいるのか、何をしようとしていたのかを忘れた。

「おいで」

いつものように、両手を広げて『女』を招く。

「おいで……ヒスイ」

ヒスイがなぜここにいるのかも、理曇には解らなかった。

ヒスイは優しく笑いながら、理曇に近付いてくる。

「会いたかった……」

甘えるように、ヒスイは理曇の腕の中へ倒れ込んだ。

理曇を見上げ、婉然と微笑む。まるで口づけを待つような仕草だった。

ほんの微かに、違和感を感じた。しかし、その理由が理曇には解らなかった。

ヒスイが背伸びし、理曇の首に腕を絡めようとする。

――違う。

気付いた瞬間に、ヒスイは理曇の腕からかき消えた。

ヒュッと、風の鳴る音がする。

剣を抜き放つのが精一杯だった。

白猿の、心臓を狙った一撃を躲しきることは出来なかった。辛うじて身を躲したものの、白猿の爪は理曇の左腕をかすめた。

白猿は再び、闇に隠れた。

左腕に、濡れた感触が広がっていくのが解る。身を隠そうにも、血の匂いを漂わせている限り、相手には居場所は知られているも同然だろう。傷ついている己を餌に、相手を誘き寄せるしかない。

萎えそうになる左腕を叱咤し、剣の柄を握り直す。

頭上の枝が、微かに震えた。気付くと同時に、白いものが理曇の頭上に降った。

退いて避けると、地面を蹴った白猿は、一直線に理曇に襲いかかった。

迷うことなく見定め、横凧に払う。

一閃で、白猿の身体は、上下二つに分けられていた。

「ヒスイは、そんなじゃないんだよ」

地に這いつくばりながら、ぎちぎちと歯をならしている頭部に、剣を突き立てる。

地面に剣で縫い止められた白猿は、ようやく動きを止めた。

自分のものではない濃い血の匂いが、辺りに立ちこめている。理曇は、匂いの中心に向かって、茂みをかき分けて進んだ。

血臭の原因は、すぐに見つかった。

血溜まりの中に、無惨に引き裂かれた子供の身体が捨てられていた。

一一間に合わなかったか。

己の無力さを、痛いほど感じた。

外した外套で子供の身体をくるみ、抱き上げた。

村に理曇が戻り着いたのは、明け方近くなってからだった。

「すまない。……間に合わなかった」

変わり果てた我が子の姿を見て、母親は号泣した。

やりきれない想いでその場を去ろうとしたとき、理曇を呼び止めたのは、子供の父親だった。

「息子が妖に攫われた時から、覚悟はついておりました。遺体が戻っただけでもありがたい。これで息子を、ちゃんと葬ってやる事が出来ます」

そう言って、男は理曇に頭を下げた。

妖に喰われたものは、その遺体はおろか、骨さえ残らないことも少なくないのだ。

「……すまない」

感謝されるほどのことは、何もできなかった。

理曇には、それしか言えなかった。すぐに後を追うことが出来ていれば、子供は無事に戻ったかもしれないのだ。

「あなたがおられたお陰で、犠牲はうちの子だけで済んだのですから」

息子を亡くしたばかりだというのに、気丈夫な男だった。

「お疲れになったでしょう。息子の葬儀の準備で、大したことは出来ませんが、どうぞお休みください」

「いや、俺は……」

「お疲れのはずです。傷の手当も必要でしょう」

左腕の感覚はすでに抜け落ち、傷の存在すら、言われるまで忘れていた。思い出すなり、傷が疼いた。血も、まだ止まってははいないようだった。理曇は、男の申し出を素直に受けることにした。

「では、この傷の手当だけ。申し訳ないが」

食堂の隅で手当を受けながら、理曇は考えていた。

幻覚に捕まるはずはないと、自分では信じていた。それなのに、理曇は幻覚に捕まってしまった。

なぜ、幻覚を見たのだろう。なぜ、ヒスイの姿を取って現れたのだろう。

白猿は、理曇の心の中の何を見つけ、何を見せようとしたのだろう。

椅子に背を預けていると、次第に緊張が緩んだのか、答えは見つからないままに、理曇の思考は眠りに捕まった。

「魔道師を何人か遣って、他にも猿妖がないか調べさせた方がいいかもな」

王都に戻った理曇の報告を聞き、遼義は言った。

「猿妖は群れることが少ないから、おそらく大丈夫だと思われていますが」

「万が一のこともあるからね。他の猿妖がないことが解れば、村の者は安心するだろうし」

「そうですね」

たとえ無駄足になろうと、それで村の人間の不安が消せるのならいいと言うのだ。

実際、理曇が村を離れるとき、次に襲われるのは自分の子供ではないかと恐れている母親は何人もいたのだ。理曇は、小さな村とは言え、自分の国の民に対する遼義の思いやりに感謝した。

「まさか、この事を見越して、俺を計都へ遣ったっていうのではないでしょうね」

「私には、未来視の出来る瞳はないよ。理曇に計都へ行ってもらったのは、別の理由だ」

「別の理由……ですか？」

まだ何か、隠されている事実があるらしい。どうせ、遼義は解き明かしてはくれないだろう。なんだか背中がむず痒い気がした。

「遼義。今は何を読んでおられるのですか？」

話題を変えるつもりで、理曇は王の手元にあった本の表紙を覗き込んだ。

「これか？ 相変わらずの昔語りだよ」

「レンが見たら、また怒るんじゃないですか？」

そうかもしれないなど、遼義は笑った。

「今、ちょうど読んでいるのは、水妖の物語なんだ」

「水妖、ですか？」

一瞬、昔出会った、あの幼い水妖が、理曇の脳裏に浮かんだ。

「あれは、美しい生き物らしいな。私はまだ、見たことはないが」

「ええ。幼い水妖でも、とても綺麗でした」

「知っているか、理曇。あれらは人の姿を借りる術を持っていて、時折、子を成すために陸へあがって人と交わることがあるそうだ」

何を思って遼義がそんな話を始めたのか、理曇には全く見当がつかなかった。

「水妖は、幼い頃は両性具有の生き物なのだが、成長して相応の大きさになると、一生の伴侶と決めた相手の性によって、自分の性別を決めるそうだ。すごいとは思わないか？」

「はあ……。すごいですねえ」

「理曇」

遼義は卓に肘杖をつき、ほんの僅かに身を乗り出した。その笑顔には何やら含みを感じる。理曇は思わず息を呑んだ。

「そろそろ結婚してもよいのではないか？」

「――はあ？」

理曇は己の耳を疑った。

「そんな顔をしなくてもいいだろう？ そろそろ、理曇は結婚してもいいんじゃないかと思うのだが」

「ちょっと待ってください」

今の理曇には、心を通い合わせた恋人は存在しない。だから余計に、遼義の言葉には実感が湧かなかった。

「それを言うんなら、レンの方がずう――っと先でしょう？」

「ああ、あれはいいんだ。人にはそれぞれ、時機というものがあるから」

「じゃ、俺はその時機だって言うんですか」

「そうだよ」

「いい加減にしてください」

これ以上遼義に付き合っていたら、どんな話に展開するのか想像がつかない。

「失礼します」

理曇は、逃げるようにして部屋を退出した。

しばらくして、部屋の隅から、深いため息が聞こえてきた。

窓辺に立って、二人の会話を黙って聞いていた羅紗のものだった。

「遼義ったら意地悪だわ」

「そうかな？」

遼義は、窓辺の羅紗に笑顔を向けた。

「なんだか、たっぷり溜めた油の中に、松明を投げ込んだような感じがするわ」

「そうかな？」

言葉とは裏腹に、遼義は笑っている。完璧に、とぼけている顔だ。

「ヒスイが可哀想だわ」

「苛めているつもりはないのだけれどね」

「うまくいかなかったら、あなたのせいよ」

羅紗は、恨めしげに遼義を睨み付けた。

「あの二人は大丈夫だよ。ただ、雨を降らせなければ地面は乾いて罅入ってしまうだろう？」

「――そんなものかしら」

また、羅紗は深いため息を吐いた。

ここまで来たら、ただ、神の采配を信じるしかない。

眼下に、ヒスイの待つ家へ戻っていく理曇の姿が見えた。

「すべてがうまくいくといいのだけれど」

羅紗は、少しずつ遠ざかっていく後ろ姿に向かって、小さく呟いた。

家へ戻る途中でのことだった。

「怪我をしたそうじゃないか。珍しいな」

声を掛けてきた女は、同じ王都警備隊第七隊に属している梨華だった。第七隊唯一の女性で、黒髪に黒い瞳をしている。優雅な顔立ちをしているが、彼女も第七隊所属だけあって、一筋縄ではいかない。剣もそこそこに扱えるが、弓に関しては、男に引けを取らない腕前を持っている。

「……悪かったな」

その件に関しては、あまり触れられたくないのだ。まさかヒスイ（の幻影）に迫られて、ぼーっとしていて殺されかけたなど、誰にも知られたくないのだ。

「ちょうどいいじゃないか。あの子の実験台になってやれば」

梨華は笑った。あの子とはヒスイのことだ。王城にいる間に薬や薬草に興味を持ったらしく、王城の薬師の元で見習いをしていると聞かされている。

ヒスイは、持ち前の明るさと可愛らしさで、王城ではみんなに可愛がられていたらしい。ヒスイ自身にはまだ会っていないのだが、すれ違うものが皆、理曇がいない間のヒスイの事を話してくれるのだ。

「なかなかいい子じゃないか」

「そうですか？」

気のない返事とは裏腹に、ヒスイを誉める言葉を聞くのは、訳もなく嬉しい。

「しかし、あまり叱るのはどうかと思うが……」

「……？ あまり叱ったりはしていないつもりですが」

「お前はそのつもりかもしれないが、ちょっと独占欲が過ぎるぞ」

「はあ……」

自分では叱っていないつもりでも、世間的には叱りすぎているのかもしれないと思えなくもないが、独占欲が過ぎるとは思えない。何について、梨華がそう思ったのかが解らず、理曇は曖昧な返事を返した。

「ヒスイとの約束だ。あとしばらくは黙っといてやるから」

笑いを堪えながら、梨華は肘で理曇をつついた。

どうやら、梨華は理曇がそれについて知っているという前提で話しているらしいが、理曇の方はさっぱり見当がつかない。

「梨華……？」

「しかし、そういつまでも隠してはおけないぞ」

笑いながら、梨華は通り過ぎていった。

「……俺が何を隠してるって言うんだ？」

さっぱり、訳が解らない。

しかし、とりあえず今は考えるのは止めることにした。ヒスイが知っているというのなら、あとでヒスイ自身に確かめればいいことだ。

長旅から戻った早々、また次の仕事が入ることはないだろう。話をするための時間は存分にある。

とりあえずは、ヒスイが待っているはずの家に戻ろう。

再び、理曇は歩き出した。

これで最後になるかもしれないと、心のどこかでヒスイは考えていた。

王城にいる間、何度も海へ戻るようにと羅紗に説得されたが、それは出来なかった。

理曇の帰りを待つこと、それが理曇との約束だったから。

すべてを明らかにすれば、理曇はヒスイをどう思うだろう。妖だからと斬るだろうか。

怖くてたまらなかった。しかし、その思い以上に、理曇に会いたかった。海へ戻り理曇を想って永らえるより、理曇の手ですべてを終わらせてくれることを、ヒスイは望んだ。理曇の手に掛かって死ぬるのなら、最後の瞬間、理曇だけを見つめていられるならそれでいいと思っていた。

震えそうになる自分を励ますように抱きしめながら、ヒスイは理曇が戻ってくるのを待っていた。

扉の開く音に、ヒスイは弾かれたように顔を上げた。

理曇の姿を見るなり、強ばっていた表情が解けた。

「ただいま」

立ち上がったヒスイは、両手で理曇の右手をきゅっと握った。

「もしかして、俺の怪我のことを誰かに聞いたのか？」

ヒスイは頷く。だから、左手に触れないようにと気遣ってくれているのかと、理曇は苦笑した。

「心配かけたな」

近付いた頭を、右腕だけで抱き寄せ、ついでに髪をくしゃくしゃになるまでかき回した。ヒスイは笑いながら、されるがままに任せていた。

ヒスイの肩を掴み、まじまじと顔を見つめる。

「なんだか、しばらく見ないうちに雰囲気が変わったな」

どことなく以前にまして丸みを増したような印象があった。

「もしかして、太ったのか？」

ヒスイは頬を膨らませ、理曇の胸をぽかぽかと叩いて抗議する。どうやらそうではないらしい

。

「ごめん。悪かった」

笑いながら理曇は謝った。

ヒスイは理曇の左腕を指し、包帯を変えることを、身振りで示した。

「ああ、頼む」

椅子に腰を下ろした理曇は、薬箱を運んできたヒスイに、素直に左腕を差し出した。

「ヒスイが薬師の見習いを始めたと聞いたから、やってもらおうと思っていたんだ」

実際のところ、右腕一本で左腕の包帯を変えるのは、至難の業だろう。たとえ見習いであろうと、ヒスイが薬や怪我について知識を持っていてくれるのは、ありがたい事だった。

「ヒスイは薬師になるのか？」

やっと慣れたらしい手つきで包帯を外していたヒスイは、ほんのちょっと考え込んでから、頷いた。

「身内に薬師や医者があると、助かる」

実際に怪我をしている分、冗談ではすまされないが。

傷口を見るなり、ヒスイは泣き出しそうな顔になった。

「手当をしているお前が、痛がってどうするんだ？」

ヒスイは、傷口と理曇の心臓を指さし、両手で二つの位置と距離を示す。さらにその距離を両側から押し縮めるような所作を繰り返した。

「……この傷が心臓に近いって意味か？」

ヒスイは頷いた。

確かにそうだろう。心臓を狙った白猿の爪を避けきれずに作った傷だったのだから。

「でも、ちゃんと生きて帰ってきたんだから、いいじゃないか」

ヒスイは首を振る。

「危険なのはよく解ってる。だけど、このときも子供が一人殺されたんだ。放っておけば、あと何人殺られてたか解らない。たとえ危険だろうと、一つでも多くの命を守れるなら、俺は行かなきゃならないんだ。解るだろう？」

ヒスイは俯いたまま、答えなかった。

「守らなきゃいけない命は、俺の命一つじゃないんだ。そりゃあ、俺だって自分の命は惜しいからな、万に一つも可能性がないのに、みすみす危険に飛び込むなんてまねはしない。しかし、俺一人で何とかなるんだったら、行って当然だろう？ この怪我は……、ちょっとした手違いみたいなもんだ」

笑って誤魔化そうとしたが、ヒスイは誤魔化されてはくれなかった。ただの手違いで、こんな怪我をするのかとでも言いたげに、理曇を睨んだ。

ふてた顔のまま、傷口に薬を塗り、新しい包帯を巻いた。

それを見ていた理曇は、何を思い出したのか、いきなり笑い出した。

どうしたのかと、ヒスイは理曇を覗き込む。

「いや……。以前とは立場が逆だなと思っただけだ。まさか、俺がヒスイに包帯を巻いてもらう

ようになるとはな」

ヒスイも、表情をゆるめて笑った。

出会ってすぐの頃、ヒスイは何度も足に傷を作り、そのたびに理曇が手当をしたのだ。確かに、今の状況はあの頃とすっかり反対だ。

「ありがとう」

綺麗に包帯を巻き終えたヒスイの頭に手を乗せると、ヒスイは嬉しそうに笑った。理曇の役に立てたことが、嬉しいのだ。

「この分だと、ヒスイもすぐに一人前だな。そうしたら、俺の役目も終わりだ」

なぜ、そんな言葉が出てしまったのか、解らない。

顔を上げた顔を強ばらせたヒスイは、首を振った。

自分と理曇を順に指し示し、左右の人差し指を並べて、触れあわず所作を作る。

理曇は知らなかったのだが、『一緒に』という意味の手話だった。

必死で訴えるヒスイの唇の動きから、やっと、『一緒に』という言葉を読みとる。

――あたしは、ずっと理曇と一緒にいたい。

失われた声で、ヒスイは理曇に訴えていた。

「でもな、ヒスイ。ずっと一緒って訳にはいかないだろう。お前も一人前になって、好きな人を見つけて、結婚しなくちゃならない。俺だってもちろんそうだ」

これほど胸に突き刺さる言葉を、ヒスイは知らなかった。まさか、好きな相手に好きな人を見つkerのだの、結婚しろだのと言われるとは思っても見なかった分、その言葉はヒスイを傷つけた。

理曇の服の裾を掴み、ヒスイは激しく首を振った。

「ヒスイ。お前だって、いつまでも子供じゃないんだから」

その言葉に、ヒスイははっと顔を上げた。

見上げた瞳が、じっと理曇を見つめる。

――出来ることならば、ずっと子供でいたかった。子供のままでいられたのなら、こんな風に『終わり』に近付くことなく、ずっと理曇の側にいられたはずだ。

理曇を見つめるヒスイの唇が、ゆっくりと動く。

――好きなのに。

「ヒスイ？」

ヒスイの身体は、すでに女へと変わりつつある。あと一月もすれば、完全に変化は終わってしまう。

――理曇が好き。

ヒスイの言葉を読みとる事が出来ないまま、今にも泣き出しそうな顔で自分の胸へと倒れ込んだヒスイの身体を受け止めた。

反射的に、その背中へ腕を廻し、抱きしめて、気付いた。

「ヒスイ……？」

抱きしめた身体は、未熟とはいえ、明らかに女独特の柔らかさを持っていた。

理震の腕を解き、体を離れたヒスイは、緑色の瞳で理震を見つめた。まなじりからこぼれた涙が、頬を伝い落ちる。

理震にも解るように、ゆっくりと唇を動かした。

――理震にもう一度会いたくて、ここへ来たの。ずっと理震と一緒にいられるなら、海には帰れなくてもいいと思ったの。

ようやくヒスイの言葉を読みとった理震の脳裏に、さっき遼義に聞かされた言葉が蘇った。

――水妖は人の姿を借りる術を持っていて、時折、子を成すために陸へ上がって、人と交わることがあるそうだ。

「まさかお前……、あの時の水妖なのか？」

ヒスイは目を伏せ、ゆっくりと頷いた。

虹色の髪ではないものの、見つめる瞳はあの時と同じ色だというのに、今までなぜ、それに気付かなかっただろう。

「あの時はまだ、子供だったのか？」

初めて出会った時、裸のヒスイには女の特徴はなかった。だから理震は、ヒスイを男だと信じていた。

「今は……、女になった…のか？」

ほんの一瞬悲しげに理震を見つめ、ヒスイは目を反らした。

視線の先には卓があり、上には剣が置かれていた。家へ戻って来て、まず旅装を解いた理震がおいたものだ。

卓に駆け寄ったヒスイは、剣を掴み、理震に向かって突き出した。

――あたしは妖なの。だから、斬って。

ヒスイの突然の行動に吞まれ、思わず理震は剣を受け取った。しかしヒスイの言葉を読みとる事に夢中で、剣を手渡された意味には気付いていなかった。

――私を殺して。

「殺せだと！？ そんな事が出来るか！」

ようやくヒスイの言葉を読みとる事が出来た理震は、声を荒げた。

しかしヒスイは、斬ってくれとさらに詰め寄る。

確かに水妖は妖だが、だからといって斬れるはずがない。ヒスイは人を喰らったり、殺したわけではない。ただ、理震会いたさに人の姿を借り、陸へ上がっただけだ。人に害を与える妖とは、違う。

「俺には斬れない」

理震はヒスイから目を反らした。

願いが叶わないと解るなり、ヒスイは理震の手にある鞘から、剣を抜こうとした。

自分で、自分の喉か胸を突く気でいるらしい事が、その表情で解る。

「止せ。危ない」

すでに死ぬ覚悟でいるヒスイに、危ないなどという言葉は欠片も通じない。

二人で剣を奪い合い、ようやく剣をもぎ取る事の出来た理震は、剣をヒスイの届かないとこ

ろへと投げ捨てた。剣は床を滑り、部屋の隅へと転がった。

ヒスイはそれを追おうとする。その身体を背後から戒め、自由を奪う。

剣を奪うことを諦めさせるために、ヒスイの腰を抱きかかえ、隣の部屋へと引きずっていく。とにかく少しでも、剣から引き離れたかった。

腕の中でヒスイは暴れたが、放してやるつもりは毛頭なかった。

理曇の左腕に、痛みが走った。どうやら傷口が開いたらしい。しかし、それにかかずにいる余裕はなかった。

縛れるようにして、床にへたり込む。背後から抱え込まれるように座り込んだヒスイは、何とか理曇の腕を外そうと、力を込めたり爪を立てたりした。

「止めるんだ、ヒスイ」

だんだんと、抵抗するヒスイの手から、力が抜けていく。

理曇の腕に、いくつもの滴が落ちてくる。ヒスイの涙だった。

「もういい。ヒスイ。もういいから」

右腕でヒスイの腰を抱いたまま、ようやく抵抗を諦めたヒスイの頭を、左手で撫でてやる。

ヒスイは泣きじゃくりながら、理曇の右腕を抱くようにして俯いた。

「ずっと、誰にも何も言えず、不安だったんだろう？」

答えはなかったが、理曇には解っていた。

理曇に斬られても構わないと自分を思い詰めるほど、ヒスイは心細かったのだ。

「確かに、お前は人ではなかったのかもしれないが、人を喰らったり殺したりしたわけではないだろう？ ならば、俺にはお前を斬る理由なんてない」

出会って以来、ずっと二人でいたのだ。ヒスイの心根がどれだけ優しいか、理曇はすでに知っている。

王はヒスイが人ではないことを知っていたのだ。それなのに、王は理曇にヒスイを斬れとも、理曇がいない間にヒスイを密かに処分することもしなかった。それが、すでに答えだった。すでにヒスイは、存在することを認められているのだ。

「俺には、お前を殺す事なんて出来ない。お前は、俺に会うために人となってここへ来たのだから？」

ヒスイは理曇の左手を捕まえ、手のひらに文字を書いた。

――ずっと会いたかった

「俺も……、ずっと、お前にもう一度会いたいと思ってた」

それは真実の思いだった。

海へ帰りたく泣く水妖を、自らの手で海へ帰してやったとはいえ、ずっと水槽に水妖を捉えたまま、自分だけのものにすればよかったと後悔したのだ。

「俺のためにここへ来たというのなら、ここにいればいい。俺が、すべて受け止めてやるから」

ヒスイは、理曇の手を自分の頬に押し当てて、泣きじゃくる。

「お前は女になればいいんだ。ちゃんと、俺が抱いてやるから」

ヒスイの首筋に顔を埋め、軽く唇で触れる。

思いがけない理曇の行為に、ヒスイは身を固くした。

「愛してる。俺が愛してやるから、お前は俺の女になればいい」

右腕の力を緩め、ヒスイを振り向かせた。

泣きじゃくっている顔を見られまいと、ヒスイは俯いた。

ヒスイの頬を両手で包み、顔を上げさせ、唇に唇で触れる。

「もう泣かなくていいから」

瞬きも忘れて見つめるヒスイに、理曇は優しく笑った。

やっと、王に与えられた謎は解けた。ヒスイの声を封じた魔道を解くための鍵、理曇に必要な覚悟とは、この事を意味しているに違いなかった。

ずっと、ヒスイが可愛い——愛おしいと思っていた。

ヒスイが男だと信じていたから、この想いは恋愛ではないと思っていた。

しかし、王都にヒスイを残し、一人で計都にいた間、理曇はずっとヒスイの事ばかりを考えていた。一人で泣いてはいないだろうか、寂しがってはいないだろうか。気にかかるのはヒスイの事ばかりだった。

王都に戻ったら、一番に会いたかったのはヒスイの笑顔だった。

その思いが、自分すら気付かないうちに理曇の弱みとなり、白猿の幻影として理曇の前に現れたのだ。

自らの危険も省みず、声も出せない不自由にもかかわらず、ヒスイは理曇に会うために陸へ上がった。この小さな身体のどこに、そんなに強い思いが隠されていたのだろう。

再び会えた事が、こうして巡り会えたことが、こんなにも嬉しい。

抱きしめることで、言葉にならない想いを伝えたかった。

腕の中にある温もりを、理曇は愛おしいと感じた。

「もし、お前が望むのなら、声を封じた魔道を解いてもらおう。きっと今なら、王も魔道を解いてくれるはずだ。ヒスイ、お前は どうしたい？」

抱きしめられたまま、ヒスイはしっかりと頷いた。

「俺も、お前の声が聞いてみたいよ」

抱きしめたヒスイの耳元に、理曇は囁いた。

理曇の胸に柔らかく身体を預けながら、ヒスイは小さく頷いた。

俯き気味のヒスイの唇には、許された事への安堵と、幸せな微笑みが浮かんでいた。

そして、至る物語

「……で、ヒスイの声を封じた魔道を解いて欲しい、と？」

卓に頬杖を付いたまま、遼義は理曇に問い返した。

「声を取り戻せば、ヒスイは二度と海へは帰れない。それでもか？」

理曇は返事に窮した。

寄り添うように隣に立つヒスイに視線をやると、ヒスイはにっこりと笑った。

「知ってたんだな？」

そうだと、ヒスイは頷く。すでにすべてを覚悟している、潔いほどの微笑みだった。

「ヒスイが望むのなら。すべてを受け止める覚悟は出来ています」

王は僅かに目を細め、唇の端を上げた。

「たいした覚悟だな。しかし、その子は妖だろう。いつ、人を喰らうやもしれんぞ」

ヒスイは表情を強ばらせ、理曇を見上げる。

理曇は、挑むような眼差しで王を見つめていた。

「もし本当にヒスイが人を喰らう妖ならば、俺が斬ります。そうでないならば、俺はヒスイを守ります」

「私が斬れと言ったらどうする？」

「連れて、逃げてみせます」

「いい加減、お止しなさい」

殺気立つ二人の会話を、柔らかな口調で止めたのは、それまで黙って二人の様子を見守っていた羅紗だった。

「遼義、意地悪が過ぎるわ。必要なのは、理曇の覚悟。そういう約束だったはずよ。つもりもないくせに、そんな事まで言わなくていいじゃない」

「ちゃんと確かめておきたかっただけだよ」

一転、表情を弛めた遼義は言った。今までの会話は、全部演技だったらしい。

「理曇はともかく、ヒスイを苛めるのは止めてちょうだい」

理曇はともかく……という一言が、少し悲しいが。

羅紗はずいぶんヒスイの事を気に入っているらしい。

それにしても、こんなに奥方に弱い（勝てないと言う方が正しいかもしれない）王が、美男美童を集めて回りに侍らかしたり出来るものかと、今更ながら思い出して、また腹を立てている理曇だった。

「ヒスイ、こちらへおいで」

立ち上がり、日の射し込む窓辺で、遼義はヒスイを手招いた。

戸惑うように、ヒスイは理曇を伺う。理曇が頷くと安心したのか、ヒスイは王の言葉に従った。

ヒスイの喉に、王は右手の指先を近づける。

その指先に光の粒子が集まっていく。

遼義の指が、細いヒスイの喉に触れた途端、光は四方へと飛び散った。

目も眩むほどの光の渦に、視界を奪われる。

「終わったよ、ヒスイ」

王の声に目を開けたヒスイは、戸惑いながら王を見つめ返した。

何かが変わったことが解る。ヒスイは、そっと自分の喉に触れてみた。

ヒスイを促すように、王は微笑みながら頷いた。

ゆっくりと、理曇に振り返ったヒスイが、唇を動かす。

「...り...えい.....」

こぼれたのは、失われたはずの声。聞く者の心を溶かす甘さを含んだ声だった。

「ずっと喉を使っていなかったのだから、大声を出したり、長い間話したりすると、喉を痛めてしまうわ。せっかくの素敵な声が台無しになってしまうかもしれないから、気をつけてね」

肩を抱くようにして、羅紗はヒスイに言った。その忠告に、ヒスイは頷いた。

「それがお前の声なのか？」

甘く、優しい響きだった。もう一度その声確かめたくて、理曇は問いかけた。

「これが.....あたしの声.....」

ヒスイは、震える手で胸を押さえていた。

声を取り戻してしまったからには、ヒスイは二度と海へは戻れない。

それでも、ヒスイは幸せだった。これからはずっと、理曇が側にいて、ヒスイを守ってくれるのだ。

「大好きよ、理曇。愛してるわ」

近付いたヒスイの身体を、理曇は抱きしめた。

抱きあう幸せな恋人達の姿に、王と王妃は見つめ合い、そして微笑んだ。

ちょうどその頃。

「魔法使い～～。大変なんだよう～～」

異変を知らせに来た青い妖に追い立てられ、寝台を離れた魔法使いは、やっと、事の重大さに気付いた。

棚に並べた小瓶の一つが、かたかたと震えるように小さく動いていた。

あり得ないはずの事態に、魔法使いは目を見張った。

その小瓶には、虹色の髪の水妖の声を封じてあったのだ。

声を封じた魔道が破られようとしていた。

ひときわ大きく揺れた小瓶は、目も眩むほどの光の粒子をまき散らし、粉々に砕け散った。

「ちびちゃんの声が～～」

青の妖は、砕けてしまった小瓶の破片を見つめ、そして魔法使いを見上げた。

「.....片づけておけ」

言いつけられた妖は、反論どころか、何もいう事が出来なかった。くるりと背を向け立ち去った魔法使いの気配が消えた頃、青の妖はそっとため息を吐いた。

表情にこそ出さないが、主が落胆していたことは解る。感情を表すのが下手な主なのだ。

割れた小瓶の隣にある、虹色の髪を詰めた瓶をちらりと眺め、青の妖はまた一つ、ため息を吐いた。

柔らかな寝台に再び転がった魔法使いは、実は青の妖が思ったとおり、かなり落ち込んでいた。

あの水妖が戻ってくることは、二度とない。あの甘い響きを耳にすることもない。手元に残された虹色の髪だけが、永遠に魔法使いの物になった。他の物はすべて、人間に取られてしまった。

妖とは言っても、自然の気が凝って生まれた水妖が、人間の気を喰らったり、人そのものを喰らったりすることはない。あるとすれば、何らかの悪い気と混じり、水妖が吸いようでなくなったときだけだ。

あの子が害を成さないと、ちゃんと解って、守ってくれる人間がいるといいのだが。

それにしても。

あの術を破ることの出来る人間が、そうは存在しないことを、魔法使いは知っていた。

それほどの力を持つ者が側にいるのならば、あの子の事を理解し、守ってくれるだろう。妖だからと、斬られることはないはずだ。

きっと、あの子は無事にいるだろう。案外、幸せに暮らしているかもしれない。

さて、他の水妖にも、あの子が戻らないことを知らせなければならないのだが……。

すでに、あの虹色の髪をしていた水妖が、戻って来ないことは確実なのだ。今更、急ぐ必要などない。

魔法使いは目を閉じ、一眠りすることに決めた。

理曇は、ヒスイを夜の街に連れ出した。妖が出ては危ないからと、今まで夜歩きを共にしたことはなかったが、王都の付近に妖が出ることはまれであったし、たとえ妖が出ても、理曇が一緒ならば何ら不安はなかった。

街のはずれの物見の台は小高い丘の上に作られており、王都の街を一望できた。

星明かりに包まれた夜空は、夜の海に似ている気がした。魔法使いの住む水底は暗く、時折降ってくる光の欠片がちょうどこんな風だったと、ヒスイは夜空を見上げながら思い出していた。

「そうか。梨華は気付いたのか」

含み笑いの理曇の声に、ヒスイは振り返った。

不意の風になぶられ、ヒスイの髪が乱れる。近付いた理曇は、髪の中に指を滑らせ、乱れを梳いてやる。

「ごめんなさい」

「謝る事じゃないさ」

梨華が黙っておいてやると言ったのは、ヒスイが女だった事だったのだ。

「その時、ちょうど一緒にいた羅紗が、あたしの代わりに言い訳してくれたの。以前、男に乱暴されそうになったことがあって、女の形では危ないって、理曇がそうさせたんだって。ばれてしまったことが解ったらヒスイが叱られてしまうから、今は黙っていてあげてって」

「なるほど。そういう事か」

身体を折り曲げ、ヒスイの肩に額を乗せて、理曇は笑った。

梨華の忠告ももつともだ。確かに、そんな事をいちいち叱っているのならば、本当にどうかしているだろう。理曇がヒスイに男の形をさせていたという事になっているのならば、悪い虫が付かないよう気を配っていると思われても仕方ないかもしれない。

「濡れ衣よね。ごめんなさい」

「かまわないさ」

実際、このような仲になって初めて、理曇は自分が独占欲の強い人間だったことを知った。今まで女に執着心を持てなかったのは、それがヒスイではなかったからだ。

ヒスイだけは特別なのだ。誰にも渡したくないと、本当に思うのだ。

だから羅紗に着せられた濡れ衣も、被ったままで構わないと思えるのだ。誰になんと言われようと、この先、ヒスイを手放すつもりはない。ずっと、ヒスイを守って生きるのだと、一緒にいると決めたのだ。

理曇は、壊さぬようにそっと、ヒスイを抱きしめた。一瞬身を固くしたヒスイは、戸惑いながら理曇に身体を預けた。

「あの、虹色の髪はどうしたんだ？」

「陸に上がるための薬をもらうために、魔法使いに渡してしまったの」

「そうか……」

ヒスイの、短くなってしまった髪を、愛おしげに理曇は何度も撫でた。出会ったときより確実に伸びた髪だが、昔ほどの長さはまだない。

「ヒスイ。髪を伸ばさないか？ きっと、お前にはその方が似合うと思うぞ」

髪を撫でられながら、以前のように理曇の胸に顔を押しつけて、ヒスイは頷いた。

「ヒスイは……、本当にこれでよかったのか？」

声を取り戻してしまった今となっては、再びヒスイを海へ戻してやることは出来ない。それでも、理曇は聞かずに居れなかった。

あまりに静かな問いかけに、ヒスイは理曇を見上げた。

優しさと、僅かな躊躇いを眼差しに浮かべ、理曇はヒスイを見つめていた。

「だってあたし、幸せだもの。理曇が、ずっとあたしの側にいるって言ってくれたんだもの。海に帰れなくなっただって、理曇がいてくれるのならそれでいい」

そう言ってくれる、自分にとってはただ一人の女を、理曇は心から愛しいと感じた。

愛する者を心に置くことは、弱みを心に持つことに等しいのかもしれない。

それでも、その弱さを強さに変えることは出来る。愛する物を守って生きていく、そのための力に変えることが出来る。

「ヒスイ。その……」

躊躇いがちに、理曇はそこで言葉を切った。小さく息を吐き出し、意を決して、言葉が続ける。

「お前の身体は、もう、女になったのか？」

理震の胸に鼻先を押しつけて、ヒスイは小さく笑った。

「たぶん、あと一月もすれば」

解ったと、理震は頷いた。

「その時は、ちゃんと抱いてやるから、な」

耳元に囁かれた言葉に、ヒスイの頬が染まる。

「俺は、ずっとお前の側にいるから」

顔を上げさせようとする、赤くなった顔を見られたくないのか、ヒスイは顔を背けようとする。強引に唇を重ね、繋ぎ止める。

「お前を守るから」

口づけの合間の睦言ではない。それは、誓いだった。

「愛してる」

自分を抱きしめる腕の力強さを感じながら、ヒスイは頷いた。

「きっと、大騒動だろうねえ～」

のほほんとした調子で、遼義は言った。

「そうですね。あれだけ可愛らしいヒスイが男だって言うだけでも騒動だったのに、実はやっぱり女の子だったなんてね」

「しかもすでに、あの子は理震のものだから」

初めから、すでにヒスイの心は理震のものだった。今更周りがなんと言おうと、その事実が変わることはない。

「すごいね。結局、あの二人は初恋を貫いたわけだ。羅紗、すごいとは思わないか？」

「ああ。私だってそうよ。初めて好きになったのは遼義だったわ。あの時からずっと、今も、好きなのは遼義だけよ」

遼義は己の失言に気付き、それとはなしに窓の外へ目を遣る。

羅紗は微笑んで、とりあえず、遼義の失言を許すことにした。

「それよりも、あの子はまだ、真聖真名を持っていないんじゃないかな？」

「きっとそうだわ」

真聖真名とは名前と対で存在するもので、真聖文字を使って、どのような子供に育てて欲しいという親から子への願いや祈りを、名前の音に織り込むのだ。普通、それは生まれた時に親から与えられる。しかし物心が付く以前に親と死に別れたり、親に捨てられたりした子供は、自分の真聖真名を知らずに育つことが多い。しかし、親以外で真聖真名を与えることができるのは、伴侶、もしくは自国の王だけなのだ。

ヒスイは人としての出自を持たないのだから、真聖真名は持っていない。

「あの子に真聖真名を与えてやらなければな」

幸に恵まれるようにと、真聖真名は子供に与えられる。遼義はヒスイに、人としての幸に恵まれるように、名を与えようというのだ。

「それとも、理震に任せた方がよいだろうか」

「どちらでも一緒だわ。きっと、二人とも、同じ文字を選ぶに決まっているもの」

恐らくそうだろうかと、遼義は同意し、笑った。

翡翠。ヒスイの瞳と同じ色の宝石の名前だ。

「あの瞳は、本物の翡翠よりも美しいがな」

「そうね」

羅紗もまた、頷いた。

「とても、いい名前だわ」

すでに一緒に暮らしている二人は、婚儀を行うつもりなどなかったのだが、それでは翡翠が可哀想だと、理曇は回り中から責められてしまった。

言われると、確かに理曇も、翡翠の花嫁姿が見たいような気がしてきた。

皆が二人の婚儀を準備してくれると言うので任せてしまったのだが、婚儀をあげてもいない男女が一緒に暮らしてはいけなないと、翡翠は皆によって連れ去られてしまった。どうやら翡翠を手に入れた理曇に対するやっかみらしい。

それだけ翡翠が皆に可愛がられているという意味でもあるのだろうが。

「ま、一ヶ月かそこらのことなんだから、おとなしく我慢しろ」

笑いを堪えて、レンは言った。

実は、理曇にとっても、その方が都合がよかったのだ。

まだ翡翠の身体は出来上がっていないのだが、同じ屋根の下で暮らしていると、どうしても触れたくなくなってしまうのだ。触れれば、抱きたいという思いを制することが出来なくなる。

翡翠は梨華の所に軟禁されている。完全に引き離されたわけではないので、安心して皆に任せることが出来た。

すれ違いの生活が続いたが、それでも寂しくはなかった。

時折出会うごとに、翡翠は女としての美しさを増していくように見えた。

もうすぐ翡翠は、理曇だけの女になる。

そして、婚儀の夜は訪れた。

ひとたび婚儀が行われると、町中総出の大騒ぎとなる。

花嫁の家まで花婿が迎えに行かなければならないのだが、途中、至る所で子供達が花婿らの行列を待ち伏せており、縄や鎖で道を塞ぎ、行方を遮るのだ。いくらかの小遣いを手渡して道を通してもらおうのだが、いくらも進まないうちに、次の子供に行方を遮られる。

どうにかこうにか花嫁の家に着いても、すぐには花嫁に会えない。先に祝宴が始まり、酒が酌み交わされる。花嫁を連れ帰れないようにと、皆で寄ってたかって花婿を酔い潰そうとするのだ。

ずいぶん経って、皆、いい加減酔いが回ってきた頃、やっと花嫁が現れた。

現れた花嫁の姿に、理曇は息を呑んだ。

白い衣装を身に纏った花嫁は、美しい女だった。

「口を開けて眺めてんじゃない」

レンに背中を思いっきり叩かれて、やっと理曇は、自分が呆然と翡翠を見つめていたことに気付いた。

「花嫁の手を取ってやれよ」

「あ...ああ.....」

背中を押され、理曇は花嫁の前に進み出た。

「お前.....、ほんつとに翡翠か？」

「ひっどーい」

笑い声を聞いて、それが翡翠だとやっと解った。

翡翠の手を引いて、今日の祝宴の主賓の席へと導く。

途中、理曇は翡翠にそっと耳打ちした。

「うまく抜け出すからな」

翡翠は微笑み、小さく頷いた。

朝まで続く祝宴の途中、花婿は花嫁をうまく連れて抜け出さないといけないのだ。花嫁をうまく連れ出せた男は、妻となる女を、一生守っていける男になると言われている。

本来ならば、頃合いを見計らって手引きしてくれる者がいたりするのだが、王都警備隊第七隊で一番年若い理曇をからかう意味もあって、誰も手引きしてくれそうもない。それどころか、抜け出す隙を与えまいと、誰彼ともなく、次々と酒を注ぎに来る。酔い潰されてしまっただけは面目が立たないが、祝いの酒を断るわけにはいかない。正気を保つのは至難の業だったが、理曇は一生翡翠を守っていける男であることを、ちゃんと証明したかった。

花嫁を迎え、祝宴はさらに盛り上がる。

それでも、夜半過ぎともなると、皆程良く酔いが回って、それぞれの酒を楽しみ始め、主賓への興味も削がれてくる。

皆の隙をついて、やっと理曇は、花嫁を祝宴の席から連れ去った。

家へ戻ると、寝台の上には花びらが山ほど撒かれていた。

「いやぁん。片付けが大変じゃないの」

呆然と寝台を見つめて呟いた翡翠を背中から抱きしめ、理曇はたまらず笑い出した。

「どうして笑うの？」

「新婚の床には、花を撒くのがしきたりなんだ」

「どうして？」

「さあな」

花の上に座らせると、翡翠は白い衣装を汚しはしないかと、しきりに気にする。その様子があまりにも可愛らしいので、理曇はまた笑い出した。

「どうして笑うの？」

「普通は、花が綺麗だとか、いい匂いだとか言う方が先だろう？」

一掴みの花びらを、翡翠の頭の上から撒いてやる。髪や肩に花びらを乗せたまま、一瞬きよとんと理曇を見つめ返した翡翠は、真っ赤になり俯いた。

その表情は愛らしく、また、愛おしく感じた。

「疲れたか？」

白い花で作られた髪飾りを外してやりながら、優しく理曇は問いかけた。

「平気。すごく楽しかったし、嬉しかった。みんながお祝いしてくれたから」

俯いたまま、翡翠は答えた。

「理曇、ありがとう」

何が？ というように、理曇は僅かに首を傾けた。

理曇の手が離れるのを感じた翡翠は、顔を上げた。

翡翠は、自分の耳を飾っている真珠を示した。婚約の印の代わりに、婚儀の今日にあわせて理曇が翡翠に贈ったものだ。

かつての翡翠が持っていた、薬を手に入れるために魔法使いに渡してしまった宝珠とは比べものにならないほど小さな物だったが、人が手に入れることの出来る真珠としては小さくはない。

「こんな高価な物を、あたしのためにありがとう」

高価だったことがばれているのかと、理曇は苦笑した。

「みんなが教えてくれたわ。細工は立派だし。珠の質もいいって」

「翡翠は宝玉が好きだろう？　なのに偽物ばかりではあんまりだからな」

「でも、あたし、理曇になんにもあげられないんだもの」

理曇は片手で翡翠の頭を抱え寄せ、額に額を付けた。

「何にもいらない。ただ、ずっと俺の側にいて、いつも笑っていてくれればいいんだ」

「うん」

答えた先から、翡翠の瞳に涙が溢れた。笑おうとするのだが、うまく笑えない。

「どうして泣くんだ？」

「嬉しくても涙は出るでしょう？」

涙を拭ってくれる指先を、翡翠は心地よいと感じた。

「この、泣き虫」

「いつも、泣かせるのは理曇だわ」

江都に残れと言った時、お互い別の生き方をしなければならぬと諭した時、理曇と離れたくないと翡翠は泣いた。確かに、理曇が泣かせたと言えなくもない。

「でも、あたし、理曇の前でしか泣かないから」

笑おうとする翡翠を抱きしめ、そっと口づける。

そんな翡翠を、理曇は心から愛しく感じた。

月明かりの下で見る翡翠の素肌は、青みがかって見えるほど、透き通る白さを持っていた。

理曇に抱かれながら、翡翠は小さく胸を喘がせていた。

初めてこの身体を抱き、海まで走ったあの時に似ている気がした。

まだ固い、胸の膨らみに触れる。

こんな風に、別の人間に触れられたことのない翡翠は、僅かに身を固くする。

怖がらずに済むよう、理震はゆっくりと、少しずつ愛撫を深めていく。

翡翠の肌は、男を誘い、狂わせるなまめかしさを持っていた。ともすれば我を忘れて、その身体に己自身を埋め、溺れてしまいたくなる。元は妖だった身体が成せる技なのかもしれない。

辛うじて理震は自分の理性を繋ぎ止め、優しく翡翠に触れた。

まだ未熟とはいえ、翡翠の身体は美しかった。

それは、理震のために用意された身体だった。

戸惑いながらも、翡翠は理震に応えようとする。

まだ何も知らない身体に、喜びを教えてやりたいと思った。男に抱かれると言う本当の意味を、教えてやりたかった。

ずっと一緒にいるという約束を果たすために、理震は翡翠を抱いた。

抱き合う二人の姿を、月だけがそっと見ていた。

翡翠は子を産んだ。

月足らずで生まれたのは、両手で包めるほどの大きさをした、真珠色の卵だった。

「恐らく、一度、澱を洗わねばならないだろうな。翡翠の身体に残る水妖の妖気が、子となって生まれるやもしれん」

王は理曇達に、予言した。明日の天気を告げるような、軽い口調だった。

「水妖が生まれてくるのですか？」

「ああ。水妖の子だったならば、恐らく月足らずで、卵の形で生まれてくるだろう」

その言葉は、現実となった。

水妖の卵は、自然の気を十分に吸収すると、ひとりで生まれてくると言う。海へ帰してやれば、海の気を浴び、卵は自然に孵る。生まれれば、他の水妖を見つけ、育ててくれるだろう。

「卵で産まれてしまった子供を生かしてやりたいのなら、海へ帰してやれ。他の生き物のように、抱いて温めてやっても、卵は孵らない。やがて死んでしまうぞ」

そう、遼義は言った。

その時は、子供を海へ帰してやろうと二人で決め、しばらく、人の少ない海辺の村へ住まいを移すことにした。

生まれた子の姿を見て、翡翠は泣いた。言葉には出さないが、自分が人でないことを改めて思い知らされた、それが悲しいのだと理曇には解る。

「泣くな。泣かなくてもいいから……」

慰めてやろうにも、言葉が見つからない。ただ抱きしめ、泣かせてやることしか理曇には出来なかった。

「行って来るから」

人に借りた船で海へ卵を帰しに行こうとすると、翡翠はまだ起きあがれるはずの身体ではないはずなのに、起きあがってきた。

「あたしも行く」

「でも、お前は……」

「行くわ。この子はあたしの子だもの。最後まで一緒にいる」

理曇の抱いた卵をそっと奪い、優しく抱きしめながら翡翠は言った。

翡翠の強い意志に、理曇は折れた。

星明かりの下、手漕ぎの小さな船は、穏やかな波の上を滑って行く。

抱きしめるように卵を抱えた翡翠は、ずっと卵に向かって話しかけていた。

「ごめんね。あなたと一緒にいてあげられない、母さんのことを許してね」

翡翠は、子供に向かって何度も詫びた。

そんな翡翠の姿は、理曇の胸を痛めた。

目を反らさずに見つめるのも、この悲しみを受け止め、一緒に背負っていくのも自分なのだとして、理曇は改めて思った。

翡翠に声を取り戻すと決めたあの時、理曇は翡翠のすべてを受け止めると決めた。これもまた、受け止めなければならない出来事の一つなのだ。

「ごめんね」

卵に囁きかけて、翡翠は卵を海中へと落とした。

真珠色の卵は、月の光を受けてきらめきながら、ゆらゆらと沈んでいく。

「――帰ろう」

その光がすっかり見えなくなってしまってから、理曇は言った。海を見つめながら、翡翠は頷いた。

理曇は再び櫂を動かし始める。

たぷんと、櫂から離れた場所で、水音が聞こえた。

「待って、理曇」

翡翠は、身を乗り出すように海面を覗き込んでいた。

「姉さん……」

月明かりを受けて輝く波の上に、人の顔が見えた。

その水妖の手には、真珠色の卵があった。

「魔法使いが、あなたがここへ来ることを教えてくれたの」

髪の色こそ違おうが、翡翠によく似た顔立ちの水妖は、そう言って笑った。

「この子は、あなたの子なのね？」

船縁に手をかけ、身を乗り出しながら、翡翠は頷く。

「この人が……、理曇があたしを愛してくれているの」

「その方はあなたのすべてを知っておられるのね」

理曇がいたから、翡翠は陸へ上がり、海へは二度と戻らなかった。水妖は寂しそうに、幾分表情を陰らせた。

「でも、あたし、幸せだから。理曇の側にいられるから、理曇があたしの側にいてくれるから、あたしは幸せなの」

ぽろぽろと涙をこぼしながら、それでも翡翠は精一杯の笑顔で、姉に向けた。

「この子は私が預かるわ。ちゃんと育てるから、あなたは心配しないで」

その言葉に、翡翠は頷いた。

水妖は、理曇に顔を向けた。

翡翠を頼むというように、深く頭を下げる。

理曇は、何もいう事が出来なかった。ただ、頭を下げ、翡翠を連れていくことを心で詫びた。

「さよなら」

そう告げて、水妖は水の中へと消えていった。

「姉さん、ありがとう」

ぽろぽろと、翡翠は涙をこぼしていた。しかし、小さな船の上では動くことも出来ず、抱きし

めてやることもできない。船の扱いに慣れていないのだから、下手に動けば船を返し、もろとも海へ落ちてしまいかねない。

「陸へ戻ろう」

翡翠が頷いたので、理曇は再び櫂を操った。

陸へ戻ったら、翡翠を抱きしめて、思う存分泣かせてやろうと思った。

伸ばすごとに色を深め、今では見事な栗色になった翡翠の髪を、風が乱す。髪を押さえながら、翡翠は何度も振り返った。

「翡翠。あの子は死んだ訳じゃない。これからちゃんと生まれてくる命だ。きっとあの子は、お前に似た美しい水妖になるさ」

そしていつか、誰かに出会い、恋をし、相手のために己の身体を作り替え、生まれ変わるのだろう。

「そうね。そうなればいいわね」

二度とは帰れない海を見つめたまま、翡翠は答えた。

突然の来訪者に、水妖は瞠目した。この男が、自ら出向いてくることはごくまれで、非常に珍しい出来事だった。

柔らかな海藻を敷いた、大きな白い貝殻を揺りかごに、真珠色の卵は置かれていた。

それを覗き込んだ魔法使いは、ほんの僅かに表情をゆるめた。

魔法使いは、左手に、淡い水色の光を放つ球体を持っていた。

「私からの祝福だ」

手のひらをゆっくり傾けると、水色の光は少しずつ形を崩し、卵の上にこぼれ落ちていく。

それは、海の気を集め、凝縮したものだった。

光は、卵に吸い込まれて、消えて行く。

卵は、海の気を吸収すると、真珠色の光を少しずつ失っていく。同時に、卵の中に影のような姿が見え始める。やがて影は水妖の形となり、ある日、透明の薄い殻を破って、子供は生まれ出てくる。

魔法使いが、卵に海の気を祝福として与えたのは、あの虹色の髪の水妖が海へと帰しに来た卵がどんな子になるのか、少しでも早く見てみたかったからだ。

魔法使いには、虹色の髪の水妖が卵になって戻って来たように思えたのだ。

卵は、さっきよりも真珠色の光を弱めたように見えた。

この分だと、思いの外、早く生まれてくるかもしれない。

静かに息づいている命を見つめながら、魔法使いは思った。